Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ
http://ir.u-gakugei.ac.jp/

Title	東日本大震災が子どもに与えた心理的影響と発達支援の課題 : 震災6年後の岩手県沿岸部の高校生調査を通して(fulltext)
Author(s)	菅井,遥; 能田,昴; 髙橋,智
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 70(1): 281-310
Issue Date	2019-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/150948
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　**70**: 281－310，2019.

東日本大震災が子どもに与えた心理的影響と発達支援の課題

── 震災６年後の岩手県沿岸部の高校生調査を通して ──

菅井　遥*1・能田　昴*2・髙橋　智*3

特別ニーズ教育分野

（2018年９月21日受理）

１．はじめに

2011年３月11日に発生した東日本大震災は，東北や関東の太平洋側を中心に甚大な被害をもたらし，子どもの暮らしを大きく変えた。家族や友人との死別・離別や住居の喪失などによって，子どもが安心して生活し，成長・発達していくことのできる環境は奪われた。震災から派生した様々な困難な状況は，子どもの心にも大きな影響を及ぼした。飯沼ら（2012）は，災害という状況が子どもの心に与える影響は，子どものこうむった被害の重大さだけでなく，子どもがその事実をどう認識しているかにも関係しており，年齢によって災害の捉え方も大きく異なることを指摘している。

一般的に，災害によるストレス反応に敏感であるのは，死や喪失といった概念の発達が十分ではない低年齢の子どもで，そのストレス反応は急性期に身体症状として表れることが多い（本間ら：2012）。それに対して，三宅（2011）や井出ら（2002）は，思春期の子どものストレス反応は，身体的な症状のほかに「がんばりすぎ」による心理的な症状として現れやすく，さらに気分の落ち込みや苛立ち，身体症状が長期化しやすい傾向にあることを指摘している。思春期の子どもの心理的変化に注目すると，大きなストレスと向き合った経験の少なさから，ストレスに対する対処法が将来に対する認識に影響を与えることが指摘されている（高田：2011）。また，幼児や小中学生と違って高校生の場合には，学年が上がるごとに不安傾向が増加している（船越ら：2014）。これは震災による生活環境の変化などが２次的，３次的に影響しているものとみられている。

震災から４か月後に福島県沿岸部で行われた調査によると，進学や就職に対する不安を感じている高校生が最も多く，現在や未来の生活への影響に対する不安が大きいことが明らかになった（笹原ら：2017）。進路に関する不安は高校生においてもストレスになるが（船越ら：2014），学業の遅れや生活環境の変化等を理由に，被災した高校生にとって進路選択はより深刻な問題としてとらえられている。

一方で，被災地の高校生の心理的変化のなかには，地元に対する愛着の深まりや，復興の役に立つような仕事に就きたいといったポジティブな変化も見られる（児美川：2016，小川：2012）。これらは外傷後成長（PTG）によるものと考えられ，人生観や価値観，他者への意識の変化とも関係している。また，西本ら（2004）は，震災による人生観の変化は，阪神・淡路大震災を経験した大学生の場合，震災から６，７年後に顕著に表れたということを明らかにした。さまざまな場面で震災から５年が区切りとされるなか，あらためて当時を振り返ることによって，被災経験に様々な意味づけを行い，当時の体験を乗り越えていくことが示唆されている。

以上のように，人生の進路選択やアイデンティティ形成の大切な時期に大災害を経験するということは，高

＊１　岩手県立久慈東高等学校教諭・2017年度 東京学芸大学 特別支援教育教員養成課程卒業
＊２　東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 博士課程 発達支援講座・白梅学園大学 子ども学部助教
＊３　東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

校生の発達に大きく影響を与えることが考えられるが，東日本大震災に関して高校生を対象とした研究は十分ではない（渡邊ら：2016）。また岩手県教育委員会が行う「心とからだの健康観察」では，震災当時小学校３～５年生だった現在の高校生のうち，約11％が「要サポート」であり，今後も長期的な支援が必要であることを示している。

それゆえに本研究では，災害が中高生に与える発達的影響に関する先行研究の検討を行い，それをふまえて東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県沿岸部のA市の高校生を対象に，震災から６年半後における被災地の高校生の東日本大震災による発達的変化について調査を実施して，人生観や他者への意識の変化，将来に対する意識の変化，そして彼らが求めている支援の課題について明らかにしていく。

２．方法

(1) 調査対象：東日本大震災当時に津波による甚大な被害を受けた岩手県沿岸部A市の岩手県立B高校に在籍する１年生から３年生の全生徒（震災当時小学校３～５年生）。B高校に在籍する生徒495名（男性216名，女性277名，未記入２名）から質問紙調査法の回答を得た。質問紙調査法の回答者のうち，質問紙調査回答の時点で同意を得ることができた16名（男性６名，女性10名）に対して半構造化面接法調査を行った。

(2) 調査方法：質問紙調査法および半構造化面接法調査。阪神・淡路大震災や新潟中越地震，東日本大震災を中心に，大きな災害での被災経験のある子どもの心理的変化に関する先行研究を検討し，震災後の子どもの発達的変化について把握した。それらをもとに全31項目の調査票を作成し，事前に調査協力校の管理職に調査内容の倫理性等について検討いただき，B高校に在籍する生徒から同意を得て調査を実施した。質問紙調査法の実施後，一人当たり30分程度の半構造化面接法調査において震災後の人生観や将来への意識の変化，現在の被災体験に対する思いや考えの聞き取りを行った。

(3) 調査内容：質問紙では，震災による被害に関する調査内容（家屋の損壊），震災前後の人生観の変化に関する調査内容，PTGに関する調査内容，進路選択や将来に関する調査内容（自由記述），震災についての考えや思いに関する調査内容（自由記述）の計31項目。なお，震災前後の人生観の変化に関する調査内容は西本・井上（2004），熊谷（2013）の先行研究を，PTGに関する調査内容は大沼・藤原（2015）の先行研究を参考に調査票を作成した。

(4) 調査期間：2017年11月。

３．災害が中高生に与える発達的影響に関する先行研究の検討

３．１　被災直後から被災後６か月に現れる発達的影響

藤井（2013）は，東日本大震災直後の中学生は「危機状況」「学業」「学校不適応」という大きく３つのことに対する不安を抱えており，このような生活不安は学年が上がるごとに高まる傾向にあることを明らかにした。危機状況に対する不安とは安全な場所で安心して生活できない状況，身近な人々の安否がわからない状況などの不安感情が当てはまる。

小林ら（2012）は，中越地震で被災した中学生の作文を分析した結果，震災から１か月後までは地震や避難生活に対する「パニック・恐怖・不安」，安否の確認や学校の再開に伴う「喜び・安心」の気持ちが多く表現されていることを明らかにした。また，何か貢献したい・役に立ちたいなどという「願い」も読み取ることができたとしている。また，震災後に学校が再開してからしばらくの間は，子どもたちの安全確保や他の学校で教室を間借りして授業を行う関係で，慣れない長時間のバス通学や外での活動の制限を余儀なくされていた。安全に過ごすために日常生活にさまざまな制約が加わることも子どもには大きなストレスとなっていたことが考えられる。

笹原ら（2017）は，高校生の学業不安について，自身の調査のみでは結論づけられないとしながらも，高校生が現在や未来の生活への影響に不安を抱えているのは，学費や学習環境への不安などが関係していることを指摘している。同時に，自宅の喪失は学習環境だけでなく，個人のアイデンティティにも影響していることを明らかにした。

被災直後の学校不適応に関しては，学習への集中が困難な生徒の増加，学級の荒れなどがみられた。学校はそれまでの日常とのつながりを感じさせてくれる場所であり，安心感・安全感を与えてくれる場所であることから，学校が再開されることはいつも通りの生活を取り戻す一歩である（原ら：2014）。磯邉（2011）も，物理的困難に対する具体的で迅速な対応が「自分たちは見捨てられていない」「一人ぼっちではない」「自分はできるんだ」という基本的信頼感や自己統制感の回復につながっていくとしており，子どもにとって「いつも通り」が大切であることを述べている。

石本（2016）は，阪神・淡路大震災当時小学生だった青年の語りを通して，被災するということは一旦「自己感覚」を失うことだと述べている。地震という自然の驚異の前に人間など取るに足らない存在であり，家族や友人の命さえ容易に失われてしまう体験は「自己感覚」をくじく恐怖体験だったと当時を振り返り，被災した子どもにとって学校再開は，他者と外傷経験を共有し，「自己感覚」を取り戻す体験であり，「被災者という役割」からひととき解放された瞬間でもあったと指摘している。

藤田（2014）は，被災地の養護教諭に聞き取り調査を行い，被災地に住む子どもたちの実態を明らかにした。学校が再開してからはじめのうちは，久しぶりに友人や先生に会えた喜びや嬉しさで盛り上がることもあったが，次第にストレスの強い状況に気持ちが入り込んでしまう児童生徒が少なくなかったことを報告している。

学校が再開して少し経つと物理的な支援が一段落し，次第に当座の生活の見通しが立ちはじめる。そのタイミングで，それまで回避してきた厳しい現実にいよいよ直面せざるを得なくなり，強い喪失感や落ち込みが子どもに訪れることが考えられる（磯邉：2011）。さらに，転校によってクラスメイトが激減したこと，部活動や課外活動に今まで通りに取り組むことができないことなどを理由に，次第に子どもたちの荒れが目立つようになっていった。これは中高生の不安定な生活環境が影響しているものと考えられる。避難所や仮設住宅等での生活では，子どもが一人で過ごすことのできる場所がほとんどなく，静かに落ち着いて生活できないことが，多くの子どもにとってストレスになっていた。

心理的影響と関連して震災は子どもたちの身体にも大きな影響を与えたことが示された。上山（2016）は宮城県沿岸部の小中学校の養護教諭への聞き取り調査を行い，震災前と比較して，肥満や骨折，皮膚疾患が増えていることを明らかにした。田中（2014）も大きな災害を経験した子どもの身体に現れる反応について考察している。生命の危険を感じた子どもたちの身体には自律神経系の不調・不全が生じていた。

例えば，頭痛や腹痛，吐き気，便通異常，食欲不振や眩暈，不眠などがみられるようになり，持久力や器用さなどの運動能力が低下することもある。結果として，疲れやすく，身体運動機能は下がり，怪我が増えることもあると指摘している。さらに免疫機能の低下もあって，風邪など感染症に罹患しやすくなったり，アトピー性皮膚炎や喘息などのアレルギー関連の身体症状が悪化することも観察されている。突然の環境変化による不安・恐怖・緊張・抑うつ・ストレス，衛生環境の悪化，思う存分体を動かすことのできる環境がなくなってしまうことなど，さまざまな要素が絡み合っていると考えられる。

高田（2011）は，学童期の子どもたちに現れるストレス症状として，学校での問題行動，学業に集中できない，成績不振，周囲の人々に攻撃的であること，うつや不安症状などとともに，食欲不振や睡眠障害があることを報告しており，子どもたちの変化を多面的に見ていくことの必要性が確認された。

地震により被災した子どもの心理的問題に関する研究は，阪神・淡路大震災以降特に注目されるようになり，これまではPTSDを中心に行われていた（奥山ら：2016）。しかし東日本大震災以降，震災を経験したあとに子どもたちにポジティブな心理変化が認められたこと，つまりPTGに関連する研究がいくつかみられるようになった。

安部（2014）は，震災後に中高生が何らかの役割を果たした経験が，青年期の発達課題の一つであるアイデンティティ感覚の形成に寄与していることを明らかにした。何らかの役割とは，例えば避難所内外での様々な手伝いやボランティア活動のことである。それらの活動に取り組むことで，周りの大人たちから頼られ，中高生は責任感とともに自信や達成感を得るとともに，身近な問題から地域全体や社会全体へと目を向けていったことも明らかになった。また，「自分は被災地である東北で，この町で育ったのだ」という，故郷に対する意識が芽生えるなど，自分の考えや経験を捉え直した中高生が多かったことも報告されている。

小林ら（2012）は，作文の分析から中越地震を経験した中学生にも同じような心理変化がみられたことを明

らかにしている。地震から数日が経ち，家族や友人の安否確認ができると「みんなの役に立ちたい」「自分にできることをしなくては」などの思いが生まれ，自分にできることを探し，実際に行動に移す生徒が現れ始めた。地震から約１か月後になると，地震や自然に対する感情といった「災害への思い」，「命・いつもの生活があることへの幸せ」「人との絆」に対する意識，「支援への思い」「自身の成長」などの感情が生まれ，作文に表現されていた。さらに，これからの生活への抱負やボランティアへの志といった「未来の自分」に関する記述があった。

このように，震災以降，自分にできることを探して取り組んだり，地域全体のことや震災前にはあまり関わりのなかった人のことなど，広い視点を持って状況を把握し物事を考えることができるようになった生徒の姿が明らかになった。しかし，作文において肯定的な感情を積極的に表現する反面，否定的な感情についてはほとんど表現しない生徒も多かった。

菅野ら（2015）は，災後教育における表現する行為について，嫌な記憶を思い出してしまうために書くことをためらう子どもがいることにふれ，子どもの書きたいという自発的な意欲をもとにして活動を行うべきであると述べている。さらに，作文などの表現活動には文字化して残す「記録」，文章を他者に読んでもらうことによって自分の過去・現在・意見を伝える「伝達」，表現したことにより心境の変化を感じさせうる「内面的変化」の３つの効果があるとしている。このことから，震災の経験を表現する活動が子どもにとってポジティブな役割を果たす可能性が考えられる。

また，小学校高学年から思春期の子どものなかには，自分よりも年下の子どもを気遣ったり，元気を装い，大人の手伝いを積極的に行い，頑張りすぎてしまう子どもも存在した。このような思春期の子どもたちに，不眠などの心理的反応が現れることもあるとされており（三宅：2011），「良い子すぎる・頑張りすぎる子」への精神的配慮の必要性が明らかになった。

高田（2011）は，思春期の子どもたちについて，ストレスと向かい合った人生経験が少ないために，震災に関連するストレスへの対処法（コーピング）が，本人の主観的な将来についての認識に左右されやすいことを指摘している。「どうせ頑張ったって意味がない」「頑張ることは無駄である」などのように，震災以降持続した努力を放棄するようになってしまったり，物事の考え方が以前と比べて刹那的なものとなってしまうなどの変化も見られる。

三宅（2011）は，災害を体験した子どもたちにとって，何らかのストレス反応が出ることは当然のことであるとし，何も反応が出ないということは，衝撃が子どもの許容量を超えているということでもあるので，注意を要すると述べている。大人からは元気に見える子どもが，本当は苦しい思いを抱え込んでいる可能性を忘れてはならない。

３．２　被災後６か月から３年以内に現れる発達的影響

震災から半年以上が経つと，子どもたちの抱える困難な状況はさらに多様で複雑なものとなってくる。被災地域の小中学校で勤務経験のある養護教諭によると，震災で親を亡くすなどの理由から教室に入ることができない子どもの存在や，家族が子どもに十分配慮することができておらず，虐待が行われてしまうというケースが見られ，被災した子どもが置かれている環境は一層厳しいものになっている（森本：2017）。また，親の離婚・再婚などで振り回され，体調不良を訴える子どもたちの存在も明らかになった。震災から時間が経過し，生活環境も変わってくる中で，被災した子どもや子どもを取り巻く環境には大きな格差が生じている。

宇佐美（2015）は，宮城県のある市の幼稚園児・小学生・中学生・高校生全員を対象とした調査を2011年度から2013年度にかけて行った。その結果，2011年11月に行った調査では，全体の約１割にあたる1,119名においてトラウマ症状が出ていたり，常に食事がとれない，眠れない，身体症状のいずれかを強く自覚していることが明らかになった。

黒木（2012）は，震災から８か月後の子どもたちは，強い不安や抑うつ，不登校やひきこもり，攻撃的な行動や注意集中力の低下による学業困難などの困難を抱えていることを指摘している。東日本大震災から１年４か月後の調査においても，高校生の不安感情の原因として学業の問題が大きいことが明らかになった（船越ら：2014）。

学年が上がるほど不安が高まる傾向が認められ，被災による学習環境の変化・不安定さは人生の進路選択に

も大きく影響を与えることが示唆されている。また，子どものうつ状態は大人とものとは少し異なり，幾日も元気がないほかに，黙り込んでしまう，機嫌が悪くて苛立つ，朝の目覚めが悪い，腹痛などの身体症状を訴える等が目立つと言われている（黒木：2012）。田中（2014）は，大規模な災害後には地域の子どもを見守る力が損なわれた結果，不適応行動が拡大して，非行や反社会的行動，薬物乱用などの問題行動として現われることもあると指摘している。

震災直後には，学校から不登校の生徒はいなくなったといわれていたが，震災から月日を経るごとに不登校状態の生徒が増加し始めた。奥山ら（2016）は，震災後の不登校の一因として，被災状況が同じような集団から被災状況が様々である集団に入ることで，一緒に回復していく仲間を失ってしまうことを指摘した。同様に本間ら（2012）も，震災以降被災の程度の小さい学校に被害の大きかった学校の児童生徒が移り，同じ校舎で学校生活を送る状況を例に挙げ，子どもたちに少なからず戸惑いや混乱が生じていたことを指摘している。このようなことから，被災した児童生徒だけでなく，被災した児童生徒を受け入れる子どもたち及び保護者への配慮も必要であると考えられる。受け入れる側の子ども達には，不安や戸惑い，偽善感，過剰な頑張り，変化に対する不適応などが生じる場合がある（磯邉：2011）。

また，塩川ら（2013）は，震災をきっかけに被害の少なかった地域に転校した中学生が，クラスメイトからの仲間外れや無視といったいじめを受け，頭痛やめまい，立ちくらみ等の症状や，悪夢や入眠困難といった睡眠障害を示した症例を報告している。いじめの原因には，震災の被害の大小による生徒同士での軋轢があり，ここでも被災の程度の違いが大きな影響を及ぼしていることが明らかになっている。この症例では，震災による直接の影響ではなく，転校や進学といった環境の変化，特に人間関係の変化がきっかけとなり，不適応状態が生じている。転出先の学校などで「震災被害にあった」と公言しづらい場合などもあるため，学校は被災した児童生徒をハイリスクな子どもととらえ，的確な見立てのもとで丁寧に支援することが求められている（磯邉：2011）。

震災をどこで経験したのか，どのように経験したのかということが，震災以降もあらゆる場面で問題となることがある。しかし，菅野ら（2015）は，内陸部にある学校で震災についての学びの場が設けられないことが，内陸部と沿岸部の温度差を一層深刻化させているのではないかと指摘している。児童生徒だけでなく，教員も被災していない地域から被災した地域へ異動することが考えられる。内陸部と沿岸部の学校の交流学習や，内陸部の学校の児童生徒による学習旅行，教員の研修など様々な場面で震災について学ぶことのできる機会を設けるべきと考える。

そのほか，震災以降不登校となる要因として，黒木（2012）は震災以前からの問題が顕在化しているとの指摘をしている。震災が起きる前から学校での人間関係や家族関係，あるいは経済的に何らかの問題があった子どもが，不登校となっているケースも少なくない。

震災後の家庭の問題に関しては，稲葉（2013）が震災から1年5か月後に各地の仮設住宅の住民を対象にした児童虐待の調査を行っている。児童虐待が増加している被災地の現状と，被災地における不登校の児童生徒の増加は，密接に関わっているとしている。

震災後の被災地の子どもたちは，親の愛情を求める気持ちはさらに強くなり，今まで以上に子どもは親をかけがえのない存在であると思っている。また，子どもたちは虐待されていることを人に話すことで，親と引き離され，親から見捨てられてしまうかもしれないという恐れを持っており，仮設住宅へ入居する際に震災以前の地域コミュニティが大きく変化していることも合わせて，被災地域における児童虐待の発見はますます難しくなっている。さらに，離婚も増加していることも加わって，子どもにとって家庭が安心できる場所とは言い難くなっている現状がある。子どもの支援には学校と家庭での連携が不可欠であるが，このような状況のもとでは，連携が一層難しくなっていると言える。

不登校や学校不適応以外に，子どもたちの学業困難も課題として現れている（黒木：2012）。学業困難は，注意集中力の低下によるものである。大幅に遅れた授業の履修に追われ，特に受験生は補習が多くなるが，仮設住宅では勉強に集中することも難しくなっており，快適な学習環境の確保が急がれる。

吉田（2015）は，中学生女子のうち27.1％が学校への不安を持っていることに注目した。思春期の女子集団の中で生活する中学生女子の精神的な不安の高さも明らかになった。被災直後の避難所生活においても，プライバシーの確保等で子どもや女性が困難さを抱えることが多かった。各種の調査においても，男子と比較して

女子の方が心理的にダメージを受けやすいことが指摘されており，特に思春期の女子についてはきめ細やかな配慮・サポートが必要とされている。また，奥山ら（2016）は女児の方が男児よりも高いPTSDスコアを示す傾向にあるということや，東日本大震災の被害を受けた女子高校生において，PTSDの症状と月経困難症の2者間に相関が認められたとしている文献を踏まえて，高校生の女子は特に，精神状態だけでなく身体状態をケアすべきであると述べている。

児童期と比較して，思春期以降になると，困難な状況に際しても大人として行動することを暗黙に求められるために，トラウマの記憶を固く封印してしまうことがありうる（黒木：2012）。また，比較的年齢の若い就学前から小学校低学年は災害直後に症状を呈し，保護者も心配をして外来を受診する反面，比較的年齢の高い小学校高学年と中学生は，災害発生から時間が経過して症状が出現する場合か，災害直後からの症状が長期化している場合で，かつ症状による生活機能への影響が大きくなってから外来を初診する傾向があると考えられており（吉田ら：2016），年齢にかかわらず子どもの変化に早期に対応することや，丁寧に子どもの様子を見ていくことが大切であることが示された。

さらに，震災の被害を受けた中学生は，情緒，素行，友人関係において多様な困難を抱えており（宇佐美：2015），手厚いサポートが必要である。また，思春期ならではの問題として，親や教師などの大人との関係も重要になってくる。宇佐美（2015）が行った調査では，中学生が親と教師に見せる向社会性には違いがあることが明らかになった。反抗期と呼ばれる中学生年代では，家庭での親との関係性だけでなく，学校生活における大人や同年代との対人関係にも注意が必要である。震災後の子どもの心のケアをする場合，中学生においては思春期年代特有の葛藤などについても十分理解し，支援を行うことが重要となる。実際に被災した中学生と接するときには，被災体験に基づく抑うつ感や，過覚醒によるイライラなどのトラウマ反応なのか，それとも思春期特有の反抗を見極めていく必要がある（宇佐美：2015）。

震災から2年半後に行われた，宮城県沿岸部の市町村における小中学生対象の調査では，「いやなこと，こわいことで思い浮かべるものは何ですか」という質問に対し，「東日本大震災のこと」を全体の13.1%，「学校のこと」を全体の15.4%の子どもが選ぶという結果が出た（吉田：2015）。震災から時間が経ち，少しずつもとの生活に戻り始めたとしても，子どもの心には震災が根深く残っていることがわかる。しかし実際には，震災からある程度の時間が経ってからは「時間が過ぎてしまい，今さら震災の話をできない」という子どもからの相談が増えてきた（本郷：2014）。震災の体験を話す場が持てないこと，話す相手がいないことの問題点も出てきている。

近藤（2016）は，このように子どもが自分の思いを表出する行動を自己開示と定義している。ここでの自己開示とは「書くこと・話すこと」であり，それらの行為によって自分の思いが表現されるとしている。ただし，それらは必ずしも他者へ向かって開放的であるとは限らず，独り言のように語られたり，日記や手記のような形であらわれたりするとしている。これらのことから，「本当は話を聞いてほしい」「自分の思いを表現したい」と思っている子どもたちの声を受け止め，支援へとつなげていくことの大切さ，子どもが自己開示をした時に丁寧に話を聞くことのできる存在の必要性が読み取れる。そのためには，震災のことを話してはいけない，というようにタブー化することなく，日常の中で自然と語られるような環境づくりをしていくことが支援として考えられる。

また，この時期の子どもたちの回復において，自己肯定感や自己効力感が大きく関係していることが明らかになった。佐藤ら（2013）は，被災したA県にあるB中学校の生徒全員が取り組んだ「海抜表示プロジェクト」を例に，学校教育において児童生徒の自己肯定感や自己効力感を回復・維持・向上させる取り組みは，災害対応における防災教育・心理教育の基本的な観点に重なるとしている。そして，このような取り組みが新聞等で広く注目を集め，さまざまな人々に認められ評価されたことも，子どもたちの自己肯定感や自己効力感を回復・維持・向上させることにつながったとしており，心の支援の教育的取り組みの観点からも有効であったと考えられている。

田中（2016）は，震災を経験した子どもの語りから，子どもの成長やPTGに含まれる5つのポジティブ変容について述べている。まず1つ目は「人との関わり方の変容」である。東日本大震災以降，「絆」「助け合い」などという人とのつながりを表す言葉が多く聞かれるようになったことからもわかるように，他者とのつながりの大切さを改めて知ることになったという変化がある。これまではどちらかというと家族や親子などの

血縁関係や，ムラ社会での互いに助け合う関係が「絆」と言われていたが，震災以降，臨機応変に結びつきが変質可能であり，自らつながる相手を選択することが可能なあたらしい「絆」が生み出され，広く人々に受け入れられるようになっていった（阿部ら：2016）。

災害時という非常事態に，さまざまな場面で人々が助け合い支え合って生活していた様子から，子どもたちも人とのつながりについて考えが変わっていった。例えば，他者に親近感を抱くようになったり，困っている人には惜しまず援助をするといった変化が見られた。東日本大震災から約５年後に発生した熊本地震の際には「助けられる側から助ける側へ」といった言葉が聞かれるようになったことからも明白である。また，中薗ら（2001）は，阪神・淡路大震災から５年後に被災経験のある大学生に対して調査を行い，地震を体験した者の方が，被災地での直接活動をしたものが多いという傾向を明らかにした。このことからも，困っている人，特に災害に遭った人々を助けようとする心の変化が震災の経験から生じたことがうかがえる。

２つ目は「新たな可能性の発見」である。例えば，新しいことへ関心や，進路の幅が広がるということである。震災前はあまり地域のことに関心がなかった子どもたちが，改めて自分の住む町について考え，行動するようになったという例は少なくない。また，故郷の復興の力になるために建設関係の仕事に就きたい，漁業に携わりたい，自分が助けてもらった経験から医療関係の仕事を目指したいなど，進路への意識の変化が生まれることもある。

３つ目は，苦しい状況を乗り越え生きている自分の強さを実感し，その実感が未来直面するかもしれない困難にも対処できる自信へとつながっていく「自己の強さ」である。

４つ目は「スピリチュアルな変容」である。神仏や自然などの，科学や文明などを超える精神性や神秘性に関心を向け，聖なるものを求めようとするという心の変化である。

５つ目は「生きていることや命に対する感謝」である。震災の後「ありがとう」と思う回数が増えたと語る小学生もいた。いつもは当たり前だと思っていたことが，災害によって壊されてしまうという経験をした子どもの中には，このように命の大切さや日常へのありがたさを感じるようになった人も少なくない。

浅野（2015）は，宮城県内の中学生に対して，自己肯定感，対人規範，生きる意思，社会的絆，犯罪規範，感受性の６つの観点から，命の大切さに関する質問紙調査を行った。震災直後は，やはり命の大切さを強く感じているという結果になったが，震災から３年目の2013年度における命の大切さに関する態度は，震災前の平常時に近づいてきていた。すなわち，2012年度は震災から間もないために，命の大切さを震災前よりも強く捉え，ある種高揚した状態となり，翌2013年度は高揚した状態から低下し，平常時の捉え方に近づいた状態になったのではないかと考えられている。また，命って素晴らしいと感動する，自然のすばらしさに触れて感動するといった感受性に関しては学年間での有意差が認められ，震災直後中学１，２年生においては高揚，中学３年生のみ減少という結果になっていた。これは，中学３年生が高校受験等において強いストレスや不安を感じている結果，命の大切さに関する態度の変容が見られにくかったのではないかと考えられている。

震災以降，人とのつながりへの意識が高まっただけでなく，自分が生まれ育った地域への意識が高まったという指摘もある。田中（2016）は，震災から11か月後と２年後に宮城県石巻市の高校生へ聞き取り調査を行った。地域に残って生きようとしている高校生も，地域から離れる選択をしようとしている高校生も，自分が遭遇した震災の体験と自分が育ってきた地域での生活を，自分自身の生活のなかにどのように位置づけたらよいのかを，それぞれによく考えているように感じたと述べている。震災後２年の時期には，１年前と比べて，地域に残ろうとする若者と地域から出ていこうとする若者との間に，微妙な「ずれ」が生じてきているということについても言及している。

子どもの精神的な回復や落ち着きに関連して，吉田（2015）は被災した子どもの生活リズムにも言及している。規則正しい生活を送っている子どもの方が精神的に落ち着いているとしており，メンタルヘルス向上のためには生活リズムを整えていくことが大切であるということが改めて確認された。しかし，実際には仮設住宅という限られた空間において，家族と身を寄せ合って生活していることもあり，生活リズムを含めた生活環境を整えていくことの難しさもあることが考えられる。

熊谷（2013）は東日本大震災から１年後，震災による高校生の人生観の変化について調査した。震災の出来事によって死を身近に感じ，自分自身を見つめることができるようになった生徒は，震災のストレスに対し，明るい面に目を向けることで乗り越えようとすることがわかった。同様に，震災という辛い出来事を経験した

結果，自分のやりたいことに目を向け，何にでも前向きにとらえようという考え方になった生徒は，対処方法として震災以前と同じ生活を送ろうとしたり，自分の興味のあることに力を入れようとしていることも明らかになった。以上は比較的ポジティブな変化であると言えるが，震災に対して心理的に向き合うことができず，回避傾向にある生徒は，自分の人生に対して前向きにとらえることができていないということも示された。震災以降，子どもたちが抱えている様々な気持ちへの対処方法は，これからの人生にも大きく影響を及ぼしていること，被災体験と人生が切っても切り離せない関係にあることを示唆している。

蛯原ら（2016）は，福島県で東日本大震災を経験した若者を中心に，青年期の被災体験に関する調査を行った。これまで見てきたように「震災にも何か意味があったと思う」「この震災は転機だと思いたい」というような肯定的な意味づけがなされていることが明らかになり，被災の経験が価値観や人生観に肯定的な変容をもたらしていることが示された。

宅（2005）は，天災等のPTSDが起こりうるような壮絶な体験をしたことに対して，「それもそれでいい機会だった」「何か自分へのメッセージだったのではないか」と振り返ったりすることが，自己成長へとつながることを明らかにした。また，比較的肯定的な体験と同時に，「より大きな被害を受けた人に対するうしろめたさ」や「自己否定的罪悪感」といった罪悪感に関連した二つの因子も抽出されており，被災した人々が抱えている複雑な思いが示された。これらを踏まえて蛯原ら（2016）は，価値観や人生観がある程度定まり，自分は何かという問いに対する回答も見出しつつある青年期において今回のような大災害を体験したことは，人間的成長やアイデンティティの確立を促進したと言えるかもしれないと述べている。

宅（2005）はストレスに起因する自己成長感の発生のメカニズムについて，自分なりの意味を付与していくという心の動きは，その体験を自らの人生に組み込んでいくという内的作業の一部と言い換えることができるかもしれないと述べている。中学生や高校生において確認されている震災に関連する価値観や人生観の変化は，まさに人間的成長やアイデンティティ確立の過程上にあるものと考えられる。

３．３　被災から３年後以降に現れた発達的影響

大きな災害を経験した子どもは，震災から数年が経ってもその影響を受け続けている。震災からしばらく時間が経過したことで，子どもが示す様々な症状や行動が震災と関係するものと思われていないことがある（林：2016）。

大沼ら（2015）は，東日本大震災から３年が経過した時点での児童生徒のPTGの実態に関する調査を行った。その結果，被災した中学生の「他者との関係」や「人生に対する感謝」について大きな意識の変化が認められた。また，中学２年生から３年生にかけてわずかにPTG得点が上昇していたことについては，卒業や進学を前にして，学習意欲や進路意識が高まったことを踏まえた「将来への意識や希望」が関連している可能性を指摘した。

進路に関する意識や将来の展望は，中学生や高校生にとって最大の悩みにもなるが，震災を乗り越えていくための大きな力にもなりうる。震災という驚異的な出来事の後，人間関係の大切さを実感するなどのポジティブな変化が起こることは西本ら（2004）も指摘している。他者とのつながりだけではなく「毎日を悔いのないように生きよう」など前向きな変化もみられた。トラウマティックな出来事が，子どもに自分自身について深く考える機会を与え，人間的な成長を促進する可能性があることについても言及している。それに加えて，災害後に起こるポジティブな変化は，トラウマティックな出来事による苦痛を減らしたいという動機から起こるポジティブ幻想と考えることもできるとしており，単純にプラスの効果をもたらしたとは言えないことを示している。

震災から５年が過ぎると，被災した子どもは今後の防災対策に関することや震災の風化を恐れること，生活や心身の復興に関することに関心を寄せるようになる（中園ら：2001）。一方で，これからの災害に目を向けた活動であるはずの避難訓練や防災教育が，子どもたちのストレスになっていることも指摘されている（林：2016）。次第に震災が忘れ去られていくことに対する複雑な思いもストレスになっている場合があり，時間が経過したからこそ現れてくる不安やストレスに対する支援も求められている。

また，中薗ら（2001）は，阪神・淡路大震災を経験した大学生が震災から５年後に当時の振り返りをするという調査を行った。それによると，震災に関連して忘れられない出来事として「建築物の倒壊・火災」「人間

の死傷」や，助けることができずに死んでいく姿・知人らの死傷や死者の膨大な数などの「いのちをめぐって」起きた出来事が上位に挙がったことを明らかにした。5年が経過しても，当時の悲惨な状況が最も印象に残っているということが示された。これらに次いで忘れられない出来事としては「被災生活の辛さと人間の温かさ・逞しさ」が挙がっている。

渡邊ら（2016）は，日本で発生した大規模災害で被災した子どもの心理的影響に関する文献検討を行った。乳幼児期と児童期以降，また心理的影響と支援実践に分けて検討した結果，年齢に関係なく，災害によって多くの子どもが何らかの心理的影響を被ることが明らかになった。しかし，児童期以降に分類された文献においても，主たる対象を高校生以上にしたものはほとんど見られず，高校生年齢の子どもが抱えている困難や支援ニーズはさらに検討していく必要があると考える。また，何らかの心理的影響を被ったとしても，自分にできることを模索し，行動に移そうとしていることも示された。小林ら（2012）や安部（2014）の研究で指摘されていたように，復興の担い手としての役割を果たすことが，新たな発達を促す側面もあるとしている。

丸山（2003）は，阪神・淡路大震災から7年後に被災当時12～15歳だった大学生に対して，震災による長期的な心理的影響を明らかにするための調査を行った。7年後においては特に友人への被害が長い間，心に大きな影響を及ぼしていることがわかった。これは，調査対象となった大学生が，被災当時小学校高学年から中学校3年生であり，特に仲間との関係性を重要視する発達段階にあったことが影響しているとみられる。また，震災による被害について，その出来事を自分自身がどう思うかという主観面が心理的な影響に強く関わっている。人的・物質的被害とも，心理的な遠さ，重要度といった主観面での考えの強弱が，心理的影響の強弱に比例して現れていたことから示唆されている（丸山：2003）。

「被災した子ども」として一括りにして扱われていても，そこには一人ひとりの震災体験があるということは，今後，被災経験を後世に伝えていくに際してとても重要な前提である。さらに西本ら（2004）は，震災から6年後と7年後に考え方の変化の差が認められたことについて指摘している。災害後の心理的変化は，災害後のイベントを後追いするかたちで，タイムラグをもって考え方の変化が表れてくると結論付けている。

2001年9月11日にアメリカ同時多発テロ事件が起きた際には，その惨劇を阪神・淡路大震災当時の状況と重ね合わせ，つらい経験を思い出してしまった人がいたという結果も出ている（丸山：2003）。岡田ら（2005）は阪神・淡路大震災から9年後に，震災当時幼稚園児だった子どもにアンケート調査を行い，被災当時幼稚園児で調査時には中学生になった子どもにとっても震災の記憶は鮮明なものであり，22%が「震災の話をするのが嫌だ」と答えている。また，「阪神・淡路大震災のときこわかった」と答えた生徒と「こわくなかった」と答えた生徒の間では，現在の心身の状況に差がみられた。さらに，自分や家族が阪神・淡路大震災の被害にあった子どもたちは，「自分は将来についてほとんど考えない」という回避傾向を示す傾向にあった。このことからも大災害の経験が将来への認識に影響を与えていることが示された。

江澤（2012）は兵庫県教育委員会「阪神・淡路大震災の影響により心の健康について教育的配慮が必要な児童生徒数の推移」に触れ，心の健康について教育的配慮を必要とする児童生徒数（小中学生）は，1998年度の4,106人をピークに，2001年度は3,142人，2003年度1,908人，2005年度808人，2009年度74人であることを紹介している。2009年度に小中学校に在籍する児童生徒のほとんどは阪神・淡路大震災後に生まれているが，それでもなお何らかの教育的ニーズを有する児童生徒の存在が明らかになった。

同様の調査が東日本大震災の被災県においても実施され，岩手県教育委員会では毎年9月に「心とからだの健康観察」を行っている。震災の影響の大きかった沿岸部の12市町村と内陸部に分けて分析を行っているが，2016年度調査では，沿岸12市町村で教育相談が必要な「要サポート」であると判断された児童生徒は全体の13.3%であり，震災から5年目の2016年に中学校・高校は2年続けて減り，小学校は横ばいから減少に転じた。小・中・高校生の全ての年代において沿岸部の児童生徒の方が要サポートである割合は大きいが，内陸部でも要サポートの児童生徒が全くいないというわけではない。また，震災から5年半が経過した2016年9月の調査において，初めて要サポートになった児童生徒は2.6%いることが明らかになり，今後も長期的に支援が必要であることが示された。

小学生の頃の被災体験が，大人になって急に現れる場合もある。清水（2013）は，小学6年生で阪神・淡路大震災を経験し，両親を亡くした女子児童の事例について報告している。その女子児童は父方の祖父母に引き取られ生活するが，結婚し出産を迎える段階で「自分が母親になることが想像できない」「3人の家庭ができ

あがるということが想像できない」と嘆いていた。出産直後にも「両親に会わせてほしい」と取り乱すことがあり，震災によって両親を失ったことで，自分が家庭をもったり，母親になるということに対するイメージが持てなかったことが考えられる。

このように被災から長い年月が経て，一見乗り越えたように見えても，他の事件や事故，災害によって震災を再体験してしまう可能性があることや，大きなライフイベントを迎える時に何らかの影響が出ることを想定して，適切な配慮や支援を構築・準備しておくことが求められている。

４．東日本大震災を経験した高校生の人生観や進路に関する質問紙調査の結果

東日本大震災を経験した高校生計495名に対して質問紙調査を行った。調査票の内容は，人生観の変化及びPTGに関する質問項目，進路選択に関する質問項目，震災に対する考えについての自由記述から構成されている。今回の調査票回答者の性別と被害状況を**表１**に示す。回答者のうち，震災当時住んでいた家屋の被害の状況が全壊・半壊・一部破壊の被害ありと回答したものの割合は，28.9％である。

表１　性別・被害状況の人数（N=495）

性別			家屋の損壊				
男子	女子	未記入	全壊	半壊	一部破壊	被害なし	覚えていない
216	277	2	96	27	20	344	8

４．１　人生観の変化

震災後の人生観の変化に関する尺度，それぞれの項目の平均および標準偏差は**表２**の通りである。回答は「まったく思わない」「あまり思わない」「ややそう思う」「とてもそう思う」「わからない」の５件法とし，「まったく思わない」を１点，「あまり思わない」を２点，「ややそう思う」を３点，「とてもそう思う」を４点，「わからない」及び欠損値をそれぞれ０点とした。「12いつ何が起きるかわからないと思うようになった」(3.69)，「18家族や友人など，周りの人のありがたさがわかった」(3.58)，「10命の尊さを感じるようになった」(3.53）について，特に高い得点を示した。

人生観の変化の25項目について，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果を**表３**に示す。各因子に含まれる項目の意味内容を検討した結果，「20人のすばらしさを，前よりも感じるようになった」「21周りの人にやさしくしようと思うようになった」「19友だちや家族など他の人たちのことを，前よりも身近な存在だと思うようになった」「16人と人とのつながりや絆の大切さを感じるようになった」「15困っている人を助けたいと思うようになった」「18家族や友人など，周りの人のありがたさがわかった」「８なにが自分にとって大事か，前よりもよくわかるようになった」「11備えあれば憂いなし（＝もしものことがあっても，準備をしていれば心配ない），と思うようになった」は「他者とのつながりと備え」に関する因子，「２前よりも，積極的にものごとに取り組めるようになった」「１大変なことを，前よりも上手に解決できるようになった」「３やりたいことをして生きないと損だと感じるようになった」「４前よりも，自分はいろいろなことに挑戦できるチャンスを持っていると思うようになった」「５自分自身のことや将来のことを見つめ直した」「６自分が大きくなったときに自分や自分の周りがどんなふうになってほしいか，新しい考えができた」「７前よりも１日１日を悔いのないように大切にするようになった」は「自己の成長と積極性」に関する因子，「10命の尊さを感じるようになった」「９死というものが身近に感じられるようになった」「12いつ何が起きるかわからないと思うようになった」「14普段の生活のありがたさがわかった」「13ものがほしいと思わなくなった」は「命や日々の暮らしの大切さ」に関する因子，「23自然の力は恐ろしいと考えるようになった」「24世の中のあらゆる出来事のはかなさや変わってしまうということを感じるようになった」は「運命論」に関する因子，「25人をこえた力（神様や仏様，ご先祖様など）が，この世でどんなふうにはたらいているか，前よりも強く感じるようになった」「22行政や政治を信じられなくなった」「17結局自分勝手な人ばかりだと思うようになった」は「信仰と信頼」に関する因子と解釈された。

表2　人生観の変化の平均・標準偏差

	項目	平均	標準偏差
1	大変なことを、前よりも上手に解決できるようになった	2.61	0.80
2	前よりも、積極的にものごとに取り組めるようになった	2.73	0.84
3	やりたいことをして生きないと損だと感じるようになった	3.27	0.82
4	前よりも、自分はいろいろなことに挑戦できるチャンスを持っていると思うようになっ	3.00	0.84
5	自分自身のことや将来のことを見つめ直した	3.05	0.84
6	自分が大きくなったときに自分や自分の周りがどんなふうになってほしいか、新しい考えができた	2.86	0.82
7	前よりも1日1日を悔いのないように大切にするようになった	2.94	0.82
8	なにが自分にとって大事か、前よりもよくわかるようになった	3.01	0.83
9	死というものが身近に感じられるようになった	3.19	0.88
10	命の尊さを感じるようになった	3.53	0.68
11	備えあれば憂いなし（＝もしものことがあっても、準備をしていれば心配ない）、と思うようになった	3.16	0.86
12	いつ何が起きるかわからないと思うようになった	3.69	0.55
13	ものがほしいと思わなくなった	2.07	0.83
14	普段の生活のありがたさがわかった	3.44	0.67
15	困っている人を助けたいと思うようになった	3.36	0.67
16	人と人とのつながりや絆の大切さを感じるようになった	3.46	0.71
17	結局自分勝手な人ばかりだと思うようになった	2.28	0.91
18	家族や友人など、周りの人のありがたさがわかった	3.58	0.61
19	友だちや家族など他の人たちのことを、前よりも身近な存在だと思うようになった	3.26	0.79
20	人のすばらしさを、前よりも感じるようになった	3.11	0.80
21	周りの人にやさしくしようと思うようになった	3.27	0.70
22	行政や政治を信じられなくなった	2.36	0.83
23	自然の力は恐ろしいと考えるようになった	3.49	0.72
24	世の中のあらゆる出来事のはかなさや変わってしまうということを感じるようになった	3.11	0.83
25	人をこえた力（神様や仏様、ご先祖様など）が、この世でどんなふうにはたらいているか、前よりも強く感じるようになった	2.24	1.00

表3　人生観の変化の因子分析結果

	項目名	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
第1因子：他者との一つながりと備え　α＝.82							
20	人のすばらしさを、前よりも感じるようになった	.793	.001	-.123	-.013	.132	.597
21	周りの人にやさしくしようと思うようになった	.672	.008	-.036	-.038	.074	.445
19	友だちや家族など他の人たちのことを、前よりも身近な存在	.650	-.019	.008	.005	.104	.472
16	人と人とのつながりや絆の大切さを感じるようになった	.646	.011	.145	.070	-.180	.563
15	困っている人を助けたいと思うようになった	.594	.102	.112	-.059	-.108	.463
18	家族や友人など、周りの人のありがたさがわかった	.581	-.077	.153	.106	-.099	.460
8	なにが自分にとって大事か、前よりもよくわかるようになった	.236	.205	.083	.006	.155	.285
11	備えあれば憂いなし（＝もしものことがあっても、準備をして	.167	.030	.159	.054	.053	.132
第2因子：自己の成長と積極性　α＝.81							
2	前よりも、積極的にものごとに取り組めるようになった	-.025	.884	-.133	-.002	-.128	.596
1	大変なことを、前よりも上手に解決できるようになった	.037	.642	-.109	-.154	.174	.473
3	やりたいことをして生きないと損だと感じるようになった	-.027	.577	.088	.064	.037	.417
4	前よりも、自分はいろいろなことに挑戦できるチャンスを持っていると思うようになった	.235	.577	-.119	.043	-.101	.435
5	自分自身のことや将来のことを見つめ直した	-.114	.550	.245	-.070	.064	.403
6	自分が大きくなったときに自分や自分の周りがどんなふうになってほしいか、新しい考えができた	.044	.373	.063	.109	.211	.359
7	前よりも1日1日を悔いのないように大切にするようになった	.268	.294	.092	-.013	.021	.324
第3因子：命や日々の暮らしの大切さ　α＝.70							
10	命の尊さを感じるようになった	.164	-.089	.759	-.122	.012	.592
9	死というものが身近に感じられるようになった	.033	-.130	.594	.003	.238	.402
12	いつ何が起きるかわからないと思うようになった	-.131	.169	.496	.330	-.159	.511
14	普段の生活のありがたさがわかった	.302	.039	.487	.029	-.131	.532
13	ものがほしいと思わなくなった	-.048	.095	.301	-.202	.276	.187
第4因子：運命論　α＝.55							
23	自然の力は恐ろしいと考えるようになった	.070	-.068	-.050	.752	.028	.559
24	世の中のあらゆる出来事のはかなさや変わってしまうということを感じるようになった	-.025	-.017	.071	.454	.370	.402
第5因子：信仰と信頼　α＝.53							
25	人をこえた力（神様や仏様、ご先祖様など）が、この世でどんなふうにはたらいているか、前よりも強く感じるようになった	.138	.008	-.052	.096	.541	.378
22	行政や政治を信じられなくなった	-.068	.043	-.041	.112	.457	.220
17	結局自分勝手な人ばかりだと思うようになった	-.036	-.037	.091	-.051	.449	.192

因子間の相関については表４に示す。

表４　因子間相関

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	1.000	.607	.617	.455	.327
因子2	.607	1.000	.490	.264	.394
因子3	.617	.490	1.000	.509	.169
因子4	.455	.264	.509	1.000	.122
因子5	.327	.394	.169	.122	1.000

人生観の変化に関する５因子の因子得点（下位項目の単純合計）と性別，家屋の損壊の有無について，それぞれ t 検定を用いて検討を行った。また，因子得点と現在の学年については，一元配置分散分析を用いて検討した。その結果（グループ別平均得点と有意差の有無）を表５に示した。なお，家屋の損壊における被害ありは，「全壊」「半壊」「一部破壊」と回答した者とした。

表５　人生観の変化と性別・学年・家屋の被害の有無

	人生観の変化・PTG				
	他者とのつながりと備え	自己の成長と積極性	命や日々の暮らしの大切さ	運命論	信仰と信頼
性別					
男子	23.61*	18.51	14.63**	5.85**	5.80
女子	25.04	18.60	15.53	6.40	5.85
学年					
1年生	24.40	18.68	14.97	5.99	5.79
2年生	24.24	18.01	15.17	6.22	5.77
3年生	24.61	19.07	15.23	6.22	5.94
家屋の損壊					
被害あり	24.69	19.47*	15.59*	6.24	6.15*
被害なし	24.31	18.21	14.90	6.12	5.69

**：p<.01　*：p<.05

性別で比較するとすべての因子について女子のほうが得点は高く，「他者とのつながりと備え」（p<.05），「命や日々の暮らしの大切さ」（p<.01）「運命論」（p<.01）について有意差がみられた。学年別では，有意差はみられなかったものの，ほとんどの因子において学年が上がるにつれて得点も高くなっていた。家屋の損壊をみると，被害のあったグループが５つの因子全てにおいて得点が高く，「自己の成長と積極性」（p<.05）「命や日々の暮らしの大切さ」（p<.05）「信仰と信頼」（p<.05）について有意差がみられた。

４．２　進路選択や将来への影響

東日本大震災が進路への影響にあったと考える生徒は，全体の14.3％であった（n=495）。学年別に比較すると，１年生が7.8％，２年生が6.9％，３年生が28.3％となっており，学年間において３～４倍の差があることが明らかになった。

質問紙調査の自由記述欄においては，進路や将来に関しては88件の記述がみられた。これらの回答をKJ法により分析した結果，進路選択や将来については表６に示したカテゴリーが抽出された。

表6　進路選択と将来について抽出された大カテゴリーと小カテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
希望する職業等の変化	具体的な職業への就職希望／特定の職種への関心の高まり
進路選択の意識変化	進路決定の意識変化／他者との関わりの重視／社会貢献の重視／地元志向の高まり／視野の広がり／防災・復興の重視

４．２．１　希望する職業等の変化

①具体的な職業への就職希望

自らの進路に震災が影響したとする回答の中で最も多かったのは，人を助け，支える仕事，命を守る仕事につきたいと思うようになったというものであった。大災害によって生と死を身近に感じた事が影響していると考えられる。具体的な職業としては，看護師や医師といった医療系の職業，消防士や自衛隊，教師が挙げられていた。人を守る仕事としては，警察官や保育士，人を支える仕事にはカウンセラー，看護師，公務員，福祉関係の仕事が挙げられていた。

これらの職業に関心をもつようになった理由として，被災地や避難所で活動する姿を見て憧れるようになったことや，人のために働く姿に感銘を覚えたという意見が最も多かった。また，震災によって命の大切さを知ったからこそ，これからは自分が携わりたいとする意見や，自分が助けられたから今度は助ける側になりたいという意見，身近で現在も困っている人がいるからというものもあった。地域全体を震災から守っていきたいという考えもみられた。また，震災以前から人を助ける仕事や人命に携わる仕事に関心を持っていたが，震災を経験したことによって，よりその気持ちが強まったという生徒も少なくない。

他には，復興の手助けをしたい，地元のためになることをしたいという意識から，地域の活性化やまちづくりに関係するような仕事に就きたいと考えるようになったという生徒もいた。具体的には，市役所の仕事や建築士といた職業が挙げられていた。このような仕事・分野に関心をもつようになったことについて，「震災後に復旧していく街を見て」というように震災からの復興の過程や甚大な被害を受けた街を見たことを理由としている生徒が多い。

②特定の職種への関心の高まり

具体的な職業ではないが，人と関わるような仕事がしたいという回答も目立った。そのような意見の中でも「人を笑顔にしたい」という考えが多く見られた。震災を通して人のあたたかさを感じたことをきっかけに，このような進路を考えるようになったことを理由として挙げている。

進路への影響にとどまらず，「人と身近に関わっていきたい」「友人や家族や周りの人との接し方を考えるようになった」というように他者意識の変容も見られ，人生観の変化と密接に関わっていることがわかった。震災以降，様々な人と助け合う出来事やつながりの大切さを再認識したことによるものと考えられる。

４．２．２　進路選択の意識変化

①進路決定の意識変化

進路選択に対する前向きで積極的な気持ちが生まれたことが示された。震災前までの進路への考えとして「将来について適当に考えて適当に過ごしていればいい」「遊ぶことしか考えていなかった」「将来についてあまり考えたことがなかった」「震災前まではっきり決まっていなかった」などのように，進路について考えていなかった，あるいは真剣に向き合えていない状況があった。しかし，震災を経験した後では「真剣に考えるようになった」「生きているからこそできることを沢山やりたい」という考えに変化していることが明らかになった。「やろうか迷っていた職業が震災以降これしかないと思い，決断に至ることができた」というように，震災が将来への一歩を踏み出す機会となったという生徒もいた。

②他者との関わりの重視

進路や将来に関する記述でもみられたように，人と関わっていきたいという考えを持つようになったという生徒がいた。「直接人と関わり」「人を相手にする仕事をしたいと思うようになった」などといった考えの変化がみられた。これは他者意識の変化とも密接に関わっていると考えられる。

③社会貢献の重視

「自分が周りの人のために何ができるか前よりも考えるようになった」「社会に出ても社会をよりよい方向に動かせるように」というように，自身が選択した進路を自身のためだけでなく，他の人や社会のために役立てていこうという考えの広がりが見られた。自身が社会に対してどのような働きかけができるか，改めて考えるようなきっかけとして震災が作用していることが示された。また，「元々，過疎地域の活性化などに興味を持っていたが，街が完全に消えた今（当時），どうすれば活気がある街になるかなどを学びたい，考えたい」「もっと地域を活性化させたい」というように，津波による甚大な被害を受けたA市などの人口減少や過疎化に注目する考えをもつ生徒がいることも明らかになった。

④地元志向の高まり

震災以降の進路選択の意識変化があった生徒において，地元志向が強まっていることが明らかになった。具体的には「自分の町で」「岩手県内で」「県外に進もうとしたとしてもあまり離れないように」というように，なるべく今住んでいるところと近いところにいたいとする意見である。また，「大学進学するつもりだったが，地元に就職したい」というように，地域だけでなく卒業後の進路そのものの方向性が変わったとしている意見もある。その理由として「復興に携わりたいと考えている」「地元で何かしたい」「地元に密着できる仕事をしたい」ということを挙げており，自身の住んでいる地域への思いが強まったことを表している。

⑤視野の広がり

視野が広がったことに関して「身近に触れる分野が増えた」「自分の考えが変わった」「世界に目を向けるようになった」などと述べている生徒がいた。視野が広がったきっかけとなった具体的な出来事としては「支援できていた異国の人との関わり」「震災がきっかけでの人との出会い」を挙げていた。

⑥防災・復興の重視

「大学で学ぼうとしている分野を震災復興とその後の発展に結びつけて考えるようになった」というように，自身の関心と復興や街の発展をつなげるという考えの変化がみられた。地元志向の高まりとも関連するが，自身の地域を災害の脅威から守るために行動していこうとする意欲が見られた。このことからも，震災の経験が高校生のこれからの人生に大きな影響を与えていることが示された。

４．３　震災６年半後における被災体験への意識や考え

震災から６年半以上が経過した現在，被災地域で暮らしてきた高校生が，震災について，あるいは震災に関連する出来事についてどのような考えや思いを持っているのかについて，調査票の自由記述部分の記述内容から分析した。164の記述を**表７**のように「震災に関連する不安やストレス」「復興へ向けた考え」「支援への感謝」という３つのカテゴリが分けることができた。

４．３．１　震災に関連する不安やストレス

地震や津波などの災害そのものに対する恐怖心の他に，地震に対する敏感さや辛い記憶を思い出してしまうという声が挙がった。なかには，自分一人で対処できないことや予期できないことへの不安があると回答した生徒もおり，震災によって受けた大きな衝撃が，現在でも様々な不安として根深く残っていることが示された。また，震災以前の生活を恋しく思ったり，復興が進むにつれて変化していく街の様子を寂しく感じているという意見もあった。

表7　震災に対する考えや思いについて抽出された大カテゴリーと小カテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
震災に関連する不安やストレス	辛い記憶／震災関連の話題の回避／災害への不安／自然災害への恐怖／街の変化への寂しさ／震災の風化／被害の実感のなさ／葛藤や不快感
復興へ向けた考え	防災意識の向上／復興への関心／他者意識の変容／まちづくりへの関心／被災体験を伝承する意欲／命の大切さ／社会問題への関心
支援への感謝	支援に対する感謝の気持ち

①辛い記憶

「辛い記憶」に関しては，津波を目撃したことや友人を亡くしたことなどが語られていた。「高台から黒いうずを巻く津波を見た」というように，現在でも克明にその状況を覚えていて，時々その様子を思い出してしまって辛い思いをしている生徒もいた。

②震災関連の話題の回避

「震災の話題の回避」として具体的には，「あまり話したくない」という意見があった。年月が経過した今でも，震災関連の話題の取り扱いについて慎重にならなければいけないことが明らかになった。

③災害への不安

「災害への不安」は，特に「海の近くに住むことへの恐れ」として語られていた。かつて自分が住んでいた場所の復興の様子を見て，元いた場所に住むためには，まだ災害対策が不十分であるとしていた。また，自分の住んでいる地区の高台移転について述べているものもあった。

④自然災害への恐怖

「自然災害への恐怖」は，具体的には「津波への恐怖」「地震・津波への恐怖」「地震への敏感な反応」として語られていた。「地震こないでほしい。津波こないでほしい」「もう津波とかおきてほしくない」「とりあえず，もう津波は来ないでほしい。将来の人達があんなひもじい思いをするのはかわいそうだから」というように述べられており，自然災害に対して恐怖感が根強く残っていることが明らかになった。

⑤街の変化への寂しさ

「街の変化への寂しさ」「震災以前の生活への願望」が語られていた。「前みたくにぎやかな町になってほしい」「震災で地元から離れてきた人が戻ってきて震災の前のような状況をつくりたい」というように，震災以降の街に寂しさを感じていることや復興の願いがみられた。

⑥震災の風化

風化についての記述は「震災の記憶は風化させてはいけない」「ニュースとか新聞とかで東日本大震災のことを憶えていない感じの人がもういるらしいのがおそろしい」という危機感をもった記述や，「東日本大震災から何年経っても忘れないでほしい」との願いが明らかになった。また，「被災地以外の人々はもう被災地は復興したと思って忘れられている」のように，被災地とそうでない場所での考え方のギャップを感じているという意見もあった。「実際に災害を受けていない人と話すと，少し軽視されているように思う」「津波を経験した県とそうでない県での考え方の差が激しいと感じたので，改善すべきだと思った」のように，被災地の内外での溝を感じる生徒もいた。被災していない地域における防災教育や被災地の現状を伝えるための取り組みが求められる。

⑦被害の実感のなさ

「被害の実感のなさ」としては「災害被害に対する実感の無さ」「震災による困難な体験のなさ」に分けられるような声が挙がっていた。具体的には「6年経つのが早い」など震災からの年月を早く感じる声や，「自分よりも大変だった人がいる」という声があった。被害の実感のなさに加えて，被害の状況を他の人と比較し，自分はまだ大丈夫という遠慮や周囲への気遣いが垣間見えるような記述も見られた。

⑧葛藤や不快感

「葛藤や不快感」としては「復興の定義への葛藤・悩み」「ふるさとという言葉への違和感」「絆，奇跡という言葉への不快感」が語られていた。震災以降，「絆」「奇跡」という言葉が多用されるようになったことについて，「あまりにも使われすぎて，感動をあおるための道具のようで安っぽく聞こえる」というような批判的意見も示された。また，復興の現状について「どのような状態になったら復興したと言えるのだろう」「復興はいつ終わるのか」といった意見も見られ，先行きの見えない復興に対する疑問も示されたが，こうしたことは漠然とした不安感や先行きの見えなさと関連していると思われる。

４．３．２　復興へ向けた考え

①防災意識の向上

震災を経験して，防災意識が向上したことが見てとれる記述が最も多かった。具体的な備えについては「より高い所へと逃げるということを忘れない」「いつでも避難できるように準備しておく」等の避難に関することが最も多かった。その他には「備え品を前より買う意識が強くなった」「防災教育をもっと充実させたい」「地域の防災意識を高めることが大切だと思う」「死者を二度とださない町をつくりたい」という意見があった。備えの大切さに関しては「備えておくのが大切だと改めて考えました」「備えをしてしすぎることはない」というような記述があり，備えることで災害に対する不安感を軽減しているとも考えられる。また，今回経験した大災害をふまえて「この震災をみて他の地方はどのような備えをしているのだろう」と他の地域での防災についても関心を広げたという記述もみられ，災害への備えに関して視野が広がっていることも示された。

②復興への関心

現状への不満で最も多かったのは「実際は市民の声をきいていないように感じる」「この現状に対して，何かしてくれないのか」「被災地にもう少し目を向けてほしい」「復旧が完全に終わらなそうだし，政府も福島以外東北の復旧はどうでもいいと思っていそう」などという行政や政府の取り組みに対する不信感であった。実際に被災地域で生活しているものの，自分たちの意見が復興に反映されていないという不満も示された。次いで「復興がまだまだ進んでいない」「街の復興速度が遅い」のように，復興のスピードについての不満も多かった。一方で，数としては少ないが「復興していくのが実感してきた」「復興がどんどん進んでいると感じる」のように，復興の現状を肯定的に捉えている声もみられた。肯定的に捉えている意見のほとんどが，復興のスピードや新しい施設の完成について高く評価していた。

③他者意識の変容

周りの人の大切さについては「身近な人を大切にしようと思う」「身近な人を亡くして，まわりの人を大切にしようと思うように」という記述があった。また，人との繋がりに関しては「人と人とのつながりは言葉では表せないほどすごいもの」「周りの人と協力することは大切」という記述があった。生徒自身がこれらに関する出来事を経験したことがうかがえる。

④まちづくりへの関心

自身の住む街の復興について「復興には何らかの形でかかわりたい」「何か自分に手伝えることがあれば，ボランティアとして参加したい」というように，積極的に関わっていこうとする意欲があり，復興の担い手，これからの故郷の発展の担い手としての意識が高いことも示された。

⑤被災体験を伝承する意欲

被災体験を伝える相手としては「自分たちより小さい子たち」「遠い世代」など，これからの世代や海外の人々を挙げていた。これから先，自身も伝えていきたい，伝えていかなければならないと考えていることが示された。

⑥命の大切さ

他者や命に触れていた記述のなかで最も多かったものは命の大切さ，続いて日常生活の大切さ，周りの人の大切さ，人との繋がり，他者との関わり方であった。命の大切さについては「命を大事にしたい」「命の大切さを再確認できた大きな出来事だった」というように，震災によって命に関する考え方が変化したり，命の大切さを改めて感じたという声が挙がっている。これは進路に対する意識や他者意識にも大きく関わってくる部分である。日常生活の大切さについては「一日一日を大切にしようと思った」「今自分が勉強できていること，生活できていることに感謝しながら，頑張っていきたい」「いつ何がどこで起こるかはわからないから，日々，悔いのないように生きたい」というように，当たり前の生活を送れることに対する感謝を抱きながら生活していることが示された。

⑦社会問題への関心

震災からの復興とその他の社会問題についての記述が6件あった。最も多かった人口減少については「震災によって人が減り，また病院の看護師不足など，A市の過疎化が進み」「人口減少や高齢化を防ぐための対策を考え直す必要があると思う」という意見がみられた。人口減少と同様に「被災地の少子高齢化」について心配しているという声も挙がっている。

⑧支援に対する感謝

震災以降，被災地の子どもたちは様々な人たちから支援を受けてきたが，そのことに対する感謝の気持ちを語った記述は3件みられた。「支援してくださった方々に恩返しできるような仕事をしたい」「あの時に支援してくれた人に感謝しなければいけないなと思います」「たくさんのボランティアに参加して感謝を伝えたい」。またこれからは，自分達が助けられる側から助ける側になりたいという強い思いを持っていることも示された。

5．東日本大震災を経験した高校生の人生観や進路に関する半構造化面接法調査の結果

5．1　震災の影響による困難・支援ニーズ

東日本大震災を経験した高校生計16名に，震災直後から現在までの震災に関連する経験の聞き取り調査を行った。回答者の性別・学年・家屋の被害状況は以下の通りである。

表8　半構造化面接法調査回答者の性別・学年別の人数（N=16）

	男子	女子	計
1年生	1	2	3
2年生	5	5	10
3年生	0	3	3
計	6	10	16

表9　半構造化面接法調査回答者の被害状況別人数（N=16）

家屋の損壊				
全壊	半壊	一部破壊	被害なし	覚えていない
8	1	2	5	0

半構造化面接法調査の結果，震災発生当時から現在に至るまで，多岐にわたる困難・支援ニーズが明らかに

なった。426件の記述を子どもの成長・発達の視点から検討し，KJ法によって分析を行った。抽出されたカテゴリーを表10に示す。

表10　半構造化面接法調査の回答から抽出された大カテゴリーと小カテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
震災による直接的な不安・ストレス	安否の心配／喪失体験／周囲への遠慮・気遣い／フラッシュバック／住居の喪失／被災直後の記憶／震災に関する事柄の回避／自然への恐怖感／死の恐怖／アニバーサリー反応
学校生活における困難・支援ニーズ	仮設校舎の不便さ／通学の不便さ／不安定な学校環境／学校環境の変化による戸惑いや寂しさ／友人の変化／教師の不適切な言動
復興についての考え	復興への期待／復興への不安／震災の風化／被災体験の伝承／街の変化／住宅整備への問題意識／支援への感謝／社会問題への関心
進路についての考え	震災をきっかけとした進路選択／進学への経済的不安
人生観の変化	地元への愛着／防災意識の向上／被災体験の意味付け／他者意識の変容／日常生活への感謝
大人への支援ニーズ	安心できる声かけ／見守りを求める気持ち／話を聞いてくれる存在／支援者への嫌悪感

５．２　震災による直接的な不安・ストレス

「震災による直接的な不安・ストレス」については，「安否への不安」「周囲への遠慮・気遣い」「住居の喪失」など，被災直後を中心にみられるものが多く特徴的であった。

「安否への不安」については，地震が発生した時刻は午後２時46分であった。この時間帯は多くの子どもが学校や自宅，あるいは祖父母宅におり，家族の安否をすぐに確認できずにいた。今回の半構造化面接では，半数の生徒が「安否の不安」があったと回答している。数日間家族と会うことができなかったような状況下で避難生活や学校生活を過ごし，自分より幼い兄弟や被害の大きい友人を気遣って「自分は他の人より大変ではないから」というように遠慮や我慢をした経験を話す生徒もいた。本人の気遣いや頑張りが見えないストレスとなっていたことも予想される。加えて，一通りの安否が確認できたころから生活再建に向けて家族や大人たちが慌ただしく動き始め，その様子を見て子どもたちは様々な不安を抱えていたことが明らかになった。

自宅が津波によって大きな被害を受けた生徒は「学校始まってから少ししてから，親が内陸の方に行こうっていう話は聞いていたので，そういうのを聞いて，どうなのかなっては思ったりはしてましたね」と，先の見えない生活を不安に思っていたこと振り返っている。また，「自宅の再建費用とか大学進学もあったし，兄弟の進学費用とか，親に負担をかけてしまうんじゃないかっていう不安がありました」というように，家計を心配していたことを明かした生徒もいる。大人が話していることや雰囲気を敏感に感じ取り，先行きの見えない生活への不安を募らせていたことがうかがえる。

同様に，普段当たり前に暮らしてきた生活が奪われたことに対する戸惑いが強く印象に残っている生徒も多かった。震災発生直後の日々のことを「非日常すぎて，あんまりその時の気持ち覚えてないっていうか，たぶんそのときはふわふわしていて，ただそこにいたっていう感じだった」と振り返る生徒もおり，当時の惨劇を目の当たりにした子どもの戸惑いの気持ちが示された。また，「育ってきた風景とかと違ってきちゃって」と，街の様子が一変したことに対する戸惑いや寂しさを感じた生徒もいた。

「震災に関する事柄の回避」や「自然への恐怖感」については，被災直後から現在まで継続して語られていた。大きな地震・津波を経験した子どもは，漠然とした不安感や恐怖を抱え，緊張した状態が続くといわれるが，今回の聞き取りでも「（一番大変だったことや困ったことは）うーん？やっぱ怖かったことかな」「もう夜とか怖くて。ずっと怖かった」「もう涙が出ちゃって。余震とかでも，誰かいないと」というように，当時の強い恐怖感を振り返る生徒がいた。特に余震があった時，暗くなってからの時間に不安や恐怖が強かったと話していた。

「震災に関する事柄の回避」の対象としては，震災の話題，震災や被災体験に関連する場所の二つが挙げられた。震災の話題に関しては「ちょっと話したくない」「そういうテレビは見たくなかったり」というように，

直接話題に挙がることやテレビ等の話題として見聞きすることを避けてしまうということを話していた。別の生徒は「見るものみちゃったんで，話されるとぱっと頭に思い浮かんじゃったりして」と，震災直後に見た遺体が頭に浮かんでしまうことを話しており，現在もストレスの一つとなっていることが示された。また，場所に関しては，震災前に住んでいた場所について「もう思い出したくないんで」と話したり，「海は，やっぱり怖いイメージがあって。友達とかは海行ったりして写真撮ったりして，SNSとかにあげたりして。いいなあとは思うんですけど，実際行く？って言われたら，いやーって」「遠慮っていうか，ちょっと無理」というように，思い出したくない，行きたくないという形で避けている生徒がいた。

「自然への恐怖」については，地震や津波等の災害について現在も不安を抱えていたり，震災以降地震に敏感になり，その敏感さが今も続いているという声が多かった。「寝ていても目が覚める。（揺れが）小さくても起きる」「誰も気づかないようなうちに，地震！って」「一人だけびっくりしちゃって」というように，自分の心身の変化を感じていた。さらに，「ショッピングモールとか揺れるのも（怖くて）。今もです。あと，風が強くてドアががたがたいってるとびっくりするし」と，地震ではない揺れや物音にも敏感になっていることを自覚している生徒もいた。その他，「震災の３月11日は不安になりますね」「海の近く，学校があった辺りに行くと，今自分が立っている場所に来た津波の高さを想像してしまったりとか」というように不安感を抱える生徒もいた。

また，これから先，再び大きな災害が起こるかもしれないという点に関して「どこに避難したらいいのかも今は全然わからないし，だから今ここで何か起きたら，どうすればいいんだろう」や「自分が不安なことは，自分でどうにもできないこととか，どうにもならないこと」という声から，災害に限らず，予期できないことに関する不安・緊張が強い生徒の存在も示された。この生徒は他にも「他の人の話を聞くのは重すぎて耐えられない」などと述べており，他の人の気持ちや状況を想像し，不安・緊張が高まっていることが推察される。

５．３　学校生活における困難・支援ニーズ

「学校生活における困難・支援ニーズ」については，仮設校舎での学校生活の不便さや，間借りでの学校生活におけるストレスが語られていた。少し時間が経つと「仮設校舎の不便さ」が目立つようになっていった。仮設校舎での学校生活を振り返って「初めて入った時に思ったのが，狭い！」「寒くて，けっこう湿度も高くて」ということを真っ先に話し始める生徒も少なくなかった。「こんなところで私勉強できるのか？」という不安を覚えたということからも快適な学習環境ではなかったことが示された。

また，「もともと陸上のトラックがあるんですけど，そこが全部プレハブの仮設になってしまって」というように，学校の校庭等が仮設住宅に充てられたこともあり，活動場所が制限されてしまったことについて話している生徒もいた。体育の授業だけでなく，部活動の活動場所が限られていたことが確認された。校舎以外にも「校庭が使えなかったんで，遊び場に困っていた」ことや「自分の校舎じゃないんで，なんていうか，居づらかったですね，他の周りの目もあるんで。早く出たいって思っていました」というように他校の間借りに伴う心理的ストレスがうかがえる振り返りもあった。

震災発生から約１か月で新学期が始まったが，学校再開当初は津波被害のなかった学校への間借りや避難先からの通学が多かった。その時期に目立っていた困りごとは「通学の不便さ」である。被害の大きかった地域の学校では児童生徒が市内の各地域に避難し，そこからスクールバス等を利用して通学することになった。「避難先から学校に行くのにそれこそ30分とか40分とかかかってしまうので，そのくらいかけて学校に行くのも大変でした」「スクールバスとかで通ったんですけど，使うこともなかったんで乗り方とかもわからなかったし」の声からも，当時小学生だった彼らにとって慣れない長時間の通学やスクールバスでの通学はかなりストレスになっていたことがうかがえる。

このことに関連して，転校や引っ越しの多さに対する声も挙がっている。被害の大きかった学校からは転校していく児童生徒も多く，「小学校から仲良くしていた人が他の学校に行っちゃって，そういうのが寂しいなって」というように，友人が転校していってしまうことに寂しさを感じながら生活していたことの印象を強くもっている生徒もいた。

「通学の不便さ」という困りごとが目立っている時期には，街の復興が進むにつれて，仮設住宅や復興住宅の建設，自宅の再建等が進み，引っ越しや転校を経験する児童生徒も少なくなかった。それに伴って，学校で

の人間関係の変化に戸惑いを覚えた生徒もいる。小学５年生の春に転校し，中学校進学を機にもとの地域に戻ってきた生徒は「中学校に入ってからのほうが厳しくて。小学校からずっと一緒の子たちは，震災の後からずっと違う状況を一緒に味わっているっていうか。私は普通の小学校に行ったから。最初の１年間は混ざりづらさはありました」と当時を振り返っている。学年が上がるにつれて友人関係も改善されたと話していたが，転校した当初は，震災直後の辛い時期を共に過ごしてきた集団への入りにくさや戸惑いを強く感じていたことを大変だったこととして挙げている。

また，小規模校に通っていた生徒が間借りで行った学校について，「１クラス16人で過ごしていたので，急に人が多い学校に行ったので，知らない人もいっぱいいるし，すごく心細いな」と語っているように，急に新しい環境で学校生活を送らなければなかったことへの不安があったことも示された。さらに，「他校の人とかにどうだったの？とか，大丈夫だった？って聞かれて辛かった」というように，被害の大きさが異なる地域の学校へ行ったことで，被災体験の違いから，苦しい思いをした生徒がいた。一方で，「向こうの小学校の人たちもけっこう歓迎してくれてたんで，仲良しになった人もたくさんいた」というように，転校先や間借り先の学校での新しい出会いや友人関係を肯定的にとらえている生徒も少なくなかった。

震災から時間が経過するにつれて，学校へ行きたくないという気持ちを持つ子どもが現れ始めた。震災から２，３年が経った辺りのことを振り返って，「ちょっとあまり行きたくなかったなっていう時とかも正直ありました」と語った生徒がいた。学校に行きたくないという気持ちに加えて，体調を崩してしまったり，「また地震とかが来たら津波も来るんだろうなっていう恐怖」を抱えていたことも明らかにしている。震災やその後の生活の変化による様々な不安・緊張・抑うつ・ストレス等の蓄積が想定される。また，「登校したらクラスの子が学校嫌だって泣いてた」と，当時のクラスメイトの変化を振り返る生徒もいた。前とは違うクラスメイトの姿を見て，「震災ってこういうふうに人も変えてしまうんだなって」と語っていた。

「教師の不適切な言動」に関する語りとしては，被災していない教師から被災地の話をされたときの出来事を振り返り，「被害を受けた中学校の人とかは，何被害者ぶってんだって。何にもわからないくせにって」と思ったと話しており，大きな被害を受けた人々への配慮の無さがストレスになっていたことがうかがえる。

５．４　復興についての考え

高校生となった今，震災当時から現在に至るまでの復興の様子について聞くと，様々な思いを抱えながら生活していることが示された。特に多く語られていたのが「復興への不安」であり，復興の進み具合に対して疑問を感じている意見が多数出され，安心して元のように暮らせる生活になっていないことを問題視している生徒が多くいた。

街の復興のスピードに対して「まだかなって。６年たってもこれだけ？」という声や，「道路しか変わらない，道路しか整備されないだけかなあって思います。他は何も変わらないなあって毎日通ってて思います」「ちゃんと整備されていて，家を建てようと思えばいつでも建てられるくらいになっていてもいいんじゃないかなって思う」と，安心して暮らせる街への道のりが遠いことを心配している生徒もいた。また，目まぐるしく変わっていく町並みに関して，出来上がった復興住宅などを見て「ああ，ここに建てちゃうんだとか，震災前はここにあのお店あったのに今はこれなんだよなとか思っちゃう」と，故郷の変化を寂しく感じている生徒もいた。

住んでいる街や地域に対しては「本当に人がいないんじゃないかなって」「引っ越した人とかも多いし，これから人口どうなるんだろう」「まず周りの，もといた地域の人が昔のように戻ってきてほしい」というように，人口減少を心配している声がいくつも挙がっていた。「今は過疎化っていうのがあって，やっぱり人は増えてほしいかなって。A市がなくなってしまうのはいやだなっていう思いがあって」と街の存続を心配し，このまま街が消えていってしまうのではないかと不安を感じている生徒もいた。変わっていく街に対しては，「やっぱり傷跡がそこら辺に残っていると思うと，残しておかなきゃダメ」と今後被災の経験を伝えていくにあたって残してほしいと願う声もあった。また，震災以降に故郷と言われると「今住んでいるところと前住んでいるところ違うじゃないですか。だからどっち考えればいいんだろうって」と疑問や戸惑いを感じてしまうという生徒もいた。

同様に「震災の風化」への問題意識も高く，「震災から年数も経って，やっぱり覚えている人が減って，印

象的には薄くなっているのかな」「震災の意識，記憶っていうかが薄れている」というように次第に人々の記憶が薄れていくことに対する心配が多く挙がっていた。震災の風化を感じる理由としては「なんか3月11日になったら拝むくらいで」「テレビの番組で3.11のときにしか震災についてやらない」といったことが挙げられている。風化への不安を話す際には，震災の記憶を自分達が語り継いでいくことが大切だと話している生徒が多く，「震災は語り継いでいかなきゃいけないことだって思う」「やっぱり被災地として残していくことはもっとあるんじゃないかな」などと語っていた。

また，「自分のなかでは風化してきているんですよ，当時の事を忘れようとしている」「ちゃんと自分が覚えていて，みんなと話せるのかなって不安」と，自分のなかの震災の記憶が薄れてきていることに対して不安を覚えている生徒もいた。被災地以外の場所にいる人たちに伝えたいこととして，「こっちは津波でぎゃーってなって，その映像とかも全国で流れたじゃないですか。そういうのを見て，どう思ったって聞きたい」という声や「助けてほしいとかは言わないですけど，まだ思っていてほしいな」という声も挙がっている。

震災からの復興については，不安や問題意識ばかりでなく，期待感もみられた。震災以降，街に商業施設が増えたことや被災した店が次第に営業を再開し始めたことをふまえて，「便利になってきたと思う」「わくわくしますよ。次は何が建つんだろうって」と話したり，震災以降の一連の復興の様子を街の発展と考え，「（自分たちの住んでいる街が）ちゃんといい方向に変わっていく」と捉えている生徒もいた。復興に向けた様々な取り組みを通して「復興に向けて頑張ろうっていう人の団結力の強さとか，前向きでいる姿を見て，すごいいい人っていうか，人に恵まれている街だって思って。あってよかったとは絶対思わないけど，自分がA市をみる見方を変えるチャンスだったと思います」と振り返る生徒もみられた。

５．５　進路についての考え

高校生活は人生の進路選択にとって大切な時期であるが，彼らの進路選択にも震災は様々な影響を与えていることが示された。震災の経験から人を助ける仕事に関心を寄せるようになった生徒が，今回の調査では４名いた。医療系のなかでも特に看護師への関心が高まっていたが，そのきっかけとなったことは主に二つあった。

一つ目は，命・健康の大切さを感じたことである。「やっぱり周りの人が死んでいくっていうのが辛くて。何もしてあげられないのって辛いじゃないですか」「（前から看護師になりたかったが）余計，東日本大震災があって，一人でも多くの命を救いたいっていう気持ちが強かった」「津波があって，お父さんが一回流されて怪我して，かわいそうだなって思って，どうやったら治せるんだろうって思って」というように，身近な人の死や怪我という経験から看護師に関心を持ったことがうかがえる。

二つ目は，憧れの存在との出会いである。震災後に出会った看護師について「優しく接してくれて，震災の事とかも忘れるような感じで。それで，こういう人になりたいなあっていう思いが強くなって」と語っている生徒がいた。助けられる人から助ける人へという意識が高まったことがうかがえる。

復興が進むなかで，自分の住む町のこれからを作っていきたいと考える生徒も増え始めた。「高校に入ったら，自分の手で変えたいじゃないけど，色んな人の声を聞いて変えていきたいと思って，まちづくりに決めました」と，これからの復興や町の発展を担うことに意欲をみせる意見もあった。さらに，震災後のボランティアの経験から，「人があったかいっていうのを，そういうのを全国の人に知ってもらいたいっていうか，広めたい」というように，まちづくりに加えて地域の魅力を発信していきたいと考えるようになった生徒もいる。一方で，「私，まちづくりに関わりたくて。今は震災復興だからいろいろ進んでいるとは思うんですけど，来年，再来年，ラグビーワールドカップが終わったら，その先はどうなるんだろうって。何を目標にA市が発展していくんだろう」というように，これから町がどうなっていくのか心配しているということも示された。

震災の経験を伝えていくことを，将来の仕事としていきたいと考える生徒もいた。文章を書くことや英語が好きな生徒は，海外の人からの支援を受けた経験を踏まえて，「国内の人にも助けてもらったんですけど，やっぱり海外に伝える人がなかなかいなくて，海外の人にもお世話になっているのに」「その時起きたこととか，その時必要だったこととか，復興していく過程とか，そういうことをいっぱい伝えていく人が必要と思う」ということで，自分の経験を後世に残していくことに興味を持つようになったと述べている。

今回の聞き取りでは，震災以降家を建てたことによって，進学費用について不安があるという「進学に関す

る経済的不安」に関する語りがあった。「やっぱり親は自分に心配かけたくないのか，大丈夫だよっていうんですけど，そういう（心配をかけまいとする）気持ちを感じ取っちゃうと，申し訳ないなって思っちゃいますね」と，進路を選択する際に迷いや不安を抱えている様子がみられた。

５．６　人生観の変化

震災から現在までの経験を通して，地元への愛着や他者とのつながり，命に関する意識や考えが変わったと振り返る生徒がいた。

「地元への愛着」については，住んでいた地域が津波の甚大な被害を受けた生徒が「震災があった後，自分の地域っていうのがぼろぼろになったのを見てすごい悲しくなった」「住んでいる地域を大事にしてほしい」と思うようになったと語った。また，同じように人間関係も大切にしてほしいと話しており，以前にもまして地域への思いが強まっていることがうかがえる。また，震災の経験があったからこそ「今自分がA市に対して真剣に向き合える」と考えている生徒もいた。

震災に関連して今考えていることとして，防災に関することを挙げている生徒が最も多く，そのほとんどが「防災意識の向上」についてであった。その中でも一番多かったのが避難訓練に関することで，「避難の練習って大切」「すぐ逃げれるように準備しておかなきゃいけないな」「防災はしっかりしていきたい」というように考えるようになったことが示された。過去の津波災害の経験から，津波に対応した避難訓練を積極的に行っていた学校に通っていた生徒は「小学校では避難訓練とかすごくやってて，それがあったからルートとかもまっすぐ行けた」と話しており，いざという時にも普段の避難訓練が役立ったとしている。また，「家でもすぐ避難できるように，災害用のグッズを入れて保管してはいます」「助けてあげられるように，誰かを助けられるようになりたいっていう，そういうので備えていけるようになったらいいな」というように，もしもの時のために前よりも備えるようになったと話す生徒もいた。

一方で，災害に対して備えているのは家族のなかで自分だけということから「危機感ないのかな」と感じたり，避難訓練等では「周りがそんな（真剣な）空気じゃない」と感じ，地震や災害に対して備えをしているが，この備えは過剰なのではないかと考えている生徒もいた。周りの意識の薄れのほかに，本人の抱えている不安等が現れているとも考えられる。これに関連して，地震や津波という自然の脅威を目の当たりにして自然への意識が変わったとしている生徒もおり，「自然が怖いっていうのは，全部押し倒して，街を壊したり人の心を傷つけたりしちゃう」「自然災害っていうのは勝てない」と話し，様変わりした故郷の様子を見て，自然の前には力が及ばないと考えるようになったという。

「他者意識の変容」に関しては，震災当時，ものが不足していた状況の中で「地域全体で助け合ったり」したことや，震災からの復興や地域創生に関連するボランティア活動を通して「地域間の絆や繋がりができた」と感じたり，被災地の人との手紙での交流を通して「人と人との繋がりが大切にされているのかな」と考えるようになったと話している。

「日常生活への感謝」では，津波での大きな被害から「本当に急に全部なくなるっていうのがある」「その日に後悔を残さないで生きていってほしい」ということを伝えたいと思うようになった生徒や「いま普通に生活できることが当たり前に思えるけど，それが一番大切なこと」「毎日に感謝すること」が一番大切なことだと思うようになったという生徒がいた。

また，「被災体験の意味付け」に関しても多様な語りがみられた。震災直後のことを「被災したあたりは，被災してない人，いいなって思っていたりした」「正直，震災のことは自分で諦めついてた」と振り返り，「みんないろんな受け止め方と切り替え方で頑張っているのかなって思います」と，震災の出来事からの気持ちの切り替えについて話す生徒もいた。「津波がなかったら，ここまでこなかった」「これ（震災）があったってずっと騒ぐよりは，これから何をしていけばっていうのを考えていけたらと思います」と話す生徒からは，今後についての強い決意を感じることができた。

「地震があったのとなかったのでは違うんだろうなって」と，震災について振り返った生徒は「私，中学校で震災の体験を語るみたいなので，いろんな場所に行ってやってたんですけど，遠くに行って人と関わることも（震災がなければ）なかっただろうし，そういうのがあったから，私はいい方向に思っています」と震災後の様々な出来事や出会いを肯定的に捉えていることが示された。震災から６年半が経過し，高校生になった今

だからこそ「被災体験の意味付け」が行われ，震災を少しずつ自分の人生の中に位置づけていると思われる。

５．７　大人への支援ニーズ

震災発生時から現在に至るまで，周囲の大人に対する支援ニーズについて聞き取りを行った結果，「安心できる声かけ」「見守りを求める気持ち」「話を聞いてくれる存在」という小カテゴリーが抽出された。余震等で不安が大きいときには「大丈夫だよ」など安心させるような言葉をかけたり，津波が来るかどうかなどの情報をすぐに伝えてもらいたいという振り返りがあった。

「見守りを求める気持ち」に関しては，学校でも避難所でも一人になれる場所がなく「一人になって落ち着いて物事を考える時間もなかった」と振り返り，自分の身に起きた大きな出来事について，自分なりに考えたり，対処したりする機会がなかったことがうかがえた。また，身近な信頼できる大人に話を聞いてもらえるような機会がほしかったいう語りがあった。これは「支援者への嫌悪感」にも関連しており，特に震災から間もない時期には，ボランティアで来る人や普段見かけない人には怖くて話しづらかったと振り返る生徒もおり，普段からなれ親しんでいる信頼できる大人に，子どもが抱えている不安や恐怖を聞いてもらうことの大切さが示された。

被災直後からしばらく，大人は生活再建のために奔走し，子どもだけが避難所等にいるという状況も珍しくなかった。そのような状況の中で，日頃から子どもがなれ親しみ，信頼を寄せる大人といえば教師である。教師自身も被災していたり，学校が避難所となりその運営に忙殺されていたケースも多いが，震災のように困難を極める状況の中で子どもが放っておかれていないか，何らかの困っているサインを発していないかを注意・発見・対応していく役割が求められる。

６．高校生の被災体験とその発達的影響

６．１　人生観の変化及びPTG

人生観の変化については西本・井上（2004），熊谷（2013）の先行研究，PTG（外傷後成長）については大沼・藤原（2015）の先行研究に従って調査票を作成した。因子分析では「他者とのつながりと備え」「自己の成長と積極性」「命と日々の暮らしの大切さ」「運命論」「信仰と信頼」の合計５つの因子が抽出された。

性別でみると，いずれの因子においても女子の得点が高かった。西本・井上（2004）の先行研究では，女子の方が震災による心理的な影響を受けやすいとしており，東日本大震災から６年半が経過してもその傾向は変わらないことが確認された。また，多くの先行研究において，女子は男子に比べて災害から受ける心理的影響が大きいと考えられていることからも，今回の結果は妥当であると考えられる。

家屋の損壊との関係において，被害ありのほうが被害なしのグループよりも総じて得点が高かった。東日本大震災から１年後に高校生に行われた熊谷（2013）の研究では，家屋の損壊と人生観の変化には有意差がみられなかったが，今回は「自己の成長と積極性」「命や日々の暮らしの大切さ」「信仰と信頼」の因子において有意差がみられた。震災による物的損傷は，被災後の時間の経過において徐々に子どもに発達的影響を及ぼすことが示された。震災から年月が経ち，生活が落ち着き，失ったものについて考える時間が増えたことや新しい生活を始めて震災前との生活を比べられるようになったこと等が要因と想定される。

西本・井上（2004）の研究では，阪神・淡路大震災から６，７年後に「他者とのつながり」に関する人生観の変化がみられたことが示されている。今回の調査でも「周りの人にやさしくしようと思うようになった」「人と人とのつながりや絆を感じるようになった」「家族や友人など，周りの人のありがたさがわかった」などにおいて，阪神・淡路大震災後と同様の人生観の発達的変化が見られた。支援してくれた人への恩返しや感謝の気持ちを表す高校生の記述からもこのことは読み取れる。

６．２　進路の発達的変化

進路選択の意識としては，主に「地元志向の高まり」「進路選択への積極性」「視野の広がり」において変化がみられた。

「地元志向の高まり」に関しては，安倍（2014）や田中（2016）の研究でも述べられていた。震災経験と生

まれ育った地域での生活を，自身の今後の生活・人生に位置づける過程において，地域の良さを改めて感じたり，地元に残って何か自分のできることをしようという考えが生まれている。また，地元には残らないと考えている生徒でも，離れていても地域のために何か貢献したいと考えていることが示された。震災は自身の育ってきた地域を見直す契機として作用したことがわかる。

「進路選択への積極性」や「視野の広がり」に関しては，大沼ら（2015）の研究における「将来への意識や希望」が高まったという指摘と大きく関連している。また，この発達的変化は田中（2016）がPTGのポジティブ変容として示した「新たな可能性の発見」と類似している。過酷な震災体験ではあるが，それを契機とした出会いや出来事によって，自身の新たな可能性を見出していることも示された。

希望する進路・職種等については「人を助ける・守る・支える職業」「地域の活性化・まちづくりに関する仕事」「人と関わる仕事」に関する関心の高まりがみられた。「人を助ける・守る・支える職業」に関しては，実際に自分が助けられた経験と周りに困っている人を見た経験がきっかけとして挙げられ，「次は自分が助ける番になりたい」という考えが示されている。人生観の変化やPTGに関する調査においても「命の尊さを感じるようになった」（3.53）「困っている人を助けたいと考えるようになった」（3.36）という項目において平均得点が高いことが明らかになっており，これらは相互に深く関連していることが示唆される結果となった。

「地域の活性化・まちづくりに関する仕事」に関しては，前述の進路選択の意識変化における「地元志向の高まり」と関連していると想定される。このようなまちづくりへの意識の高さは，2019年のラグビーワールドカップに向けて，復興と地域の活性化を目指すA市の行政の動きも関係していると想定される。

「人と関わる仕事」についても，人生観の変化における「周りの人にやさしくしようと思った」（3.27）「人と人とのつながりや絆の大切さを感じるようになった」（3.46）という項目の得点が高いことから，震災経験が強く作用していると考えられる。田中（2016）も，PTGのポジティブ変容として「人との関わり方の変容」を挙げている。震災を通して他者との関わり方について考え直し，人と人との繋がり・関係性の重要性に気付いたことが，「人と関わる仕事」への関心を高めた要因なのではないかと推測できる。

進路への影響についてはPTGをはじめとしたポジティブな変化が見られたが，半構造化面接において家計や進学費用の負担について心配している声も挙がっており，ネガティブな影響が隠れている可能性もあるため，今後も引き続いて丁寧にみていく必要がある。

６．３　震災による困難・支援ニーズ

６．３．１　被災直後から６か月の困難・支援ニーズ

被災直後から6か月においては，「安否の不安」「学校生活の不便さ」「地震や津波への恐怖感」「見通しの立たない生活への不安」「急激な環境変化への戸惑い」のような困難と支援ニーズがみられた。

「学校生活の不便さ」については，避難場所からの通学時間の長さや校庭・校舎内において使用できる場所が限られたことが多く挙がっていた。原ら（2014）は学校をいち早く再開させることが日常性の回復の第一歩であると述べているが，実際には学校が再開したとしても，学校生活において制約は大きく，相当なストレスを抱えていることが明らかになった。また，間借りでの学校生活であればなおさらのことである。学校行事についてもなるべく通常通りに実施することが望ましく，学校では子どもが子どもらしくいられるような環境を整えていくことが大切である。

「見通しの立たない生活への不安」では，被災直後に今後の生活がどうなるかわからなかったことへの大きな不安がみられた。被害直後から親・大人は生活再建に追われ，子どもと過ごす時間が少なくなってしまう。また，普段とは違う状況で慌ただしく動く大人を見て，詳しい状況は分からなくても，何か大変なことが起きているのだと感じ，子どもはさらに不安が大きくなってしまう。教師や発達支援の専門家が子どもの状況を見て現状を説明したり，生活の見通しをもたせること，そして子どもの不安を聴いたり，話す時間を意識して設けることが不可欠である。原ら（2014）が指摘するように，子どもに「ひとりぼっちじゃない」ということや「いつでも気にかけているよ」ということを伝えてくことが大切である。

「急激な環境変化への戸惑い」については，特にそのような気持ちを吐き出すことのできる場や相手の存在の重要性が明らかになった。避難所に来るボランティアには馴染むことができなかったり，「大丈夫？」と何度も聞かれることに苦痛を感じていたりする生徒もいた。教師・スクールカウンセラーなど，被災前から馴染

みのある信頼できる大人が丁寧に話を聞く機会を設けることが重要である。同時に，子どもが一人になることができるスペースを作り，気持ちを落ち着かせたり，考えを整理できるような環境を作っていくことも不可欠である。

６．３．２　被災後６か月から３年以内の困難・支援ニーズ

被災後６か月から３年以内においては，「学校生活の不便さ」「転校による人間関係の変化」「学校不適応」のような困難・支援ニーズがみられた。

この時期に見られる「学校の不便さ」に関する困難・ニーズは，被災直後に見られていたものと違いが生じている。被災から６か月以降では，当初からみられた通学に関するものの他に，仮設校舎の不便さについての声が多く挙げられた。また従来の学校で学校生活を送れるようになっても，教室の狭さや夏の暑さ，カビの発生等の問題，校庭・体育館等の使用制限による様々な不便さを感じながら生活している様子が示された。しかし，どんなに不便でも自分の学校に戻ってきたことが嬉しく，新しくできた校舎よりも好きだったという声も挙げられた。

「転校による人間関係の変化」については，本間ら（2012）や塩川ら（2013）によって被災の度合いの違う集団へ移った時に，人間関係における様々な戸惑いや混乱が生じていることが指摘されている。被害の有無によって児童生徒間に軋轢が生じ，いじめ・排除等につながってしまうことも考えられる。被害の少ない学校においても，交流学習や震災経験から学ぶ活動を積極的に取り入れていき，子ども相互の経験や思いを共有することが重要である。また，被害の大きかった学校から被害の少なかった学校へ転校した場合の困難については奥山ら（2016）が指摘しており，この場合においても相互理解が重要になってくる。

「学校不適応」については「学校に行きたくないと思う時期があった」という言葉で語られていた。大災害のもとで厳しい生活を送ってきたのだから，学校に行きたくないなどの気持ちの変化が起こることは自然なことであるということを子ども全体にしっかりと伝えるとともに，個々の子どもの不安・緊張・抑うつ・ストレス等に丁寧に向き合い，受け止め，安心して学校生活を送ることができるように支援していく必要がある。

以上のことから被災後６か月から３年においては，多様化する子どもの不安・緊張・抑うつ・ストレス等やそれに起因する発達困難に丁寧に向き合っていくことが重要である。さらに被災の有無にかかわらず，全ての学校において震災から学ぶ活動を行っていくことも大事である。

６．３．３　被災後３年以降の困難・支援ニーズ

被災後３年以降では「震災に関連する事柄の回避」「地震への敏感さ」「災害や予期できない事柄への不安」「進路への不安」「周囲との震災に関する考えのギャップ」という困難や支援ニーズが明らかになった。被災からの時間的経過の中で，子どもたちの生活環境は大きく変化し，困難や支援ニーズも多様化していることが示された。

「震災に関連する事柄の回避」においては，６年半経過した時点でも「話したくない」「見たくない」という気持ちを抱える高校生の存在が明らかになった。林（2016）も防災教育や避難訓練がかえってストレスを与えてしまっていると指摘している。また，「地震への敏感さ」についても，被災から時間が経過しても多く見られることが示された。

「災害や予期できない事柄への不安」については，現在も「またいつか大きな地震が来るのではないか」と不安を抱えていたり，「自分でどうにもできないこととか，どうにもならないこと」として捉えていることが示された。丸山（2003）は，大規模テロのニュースから阪神・淡路大震災での辛い経験を思い出した事例があったと述べているが，被災後の長い時間経過における子どもの発達困難の顕在化に関する研究は不十分である。東日本大震災での被災経験者へのフォローアップ調査を通して実態を探り，支援のあり方を明らかにしていく必要がある。

「進路への不安」においては進学費用に関して不安があるという声が挙がっていた。進路選択の時期においては，学校で奨学金等の情報を十分に提供したり，進路指導において丁寧に対応したりして，本来希望する進路を諦めることのないような配慮が必要である。

「周囲との震災に関する考えのギャップ」においては，被害の大小に関するものと防災意識に関するものの

二つが挙がっている。被害の大小については，被害の小さかった人と被害の大きかった人との間の関係については，現在においても解消されていない問題として存続している。防災意識に関しては震災記憶の風化とも関連し，次第に備えの意識が低下していることが示された。震災記憶の風化に関しては震災後の大きな関心事であるとされ（中薗ら：2001），今回の調査でも高校生の大きな関心事であることが示された。

周囲とのギャップに関しては，多様な被災経験をした人で構成された震災のことを話す機会を設けることが重要である。震災の経験を話すことについて，本郷（2014）はある程度の時間が経過してしまうと「話す場がない」「話す相手がいない」「今さら話せない」という悩みを抱える子どもが増えてくることを指摘している。子どもが被災経験を孤独に抱え込んでしまわないためにも，体験を語り合うような場を継続的に設けることは有効である。

7．おわりに

本研究では，災害が中高生に与える発達的影響に関する先行研究の検討を行い，それをふまえて東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県沿岸部のA市の岩手県立B高校在籍の全生徒（被災当時は小学3年生から5年生）を対象に，震災から6年半後における被災地の高校生の東日本大震災による発達的変化について調査を実施し，人生観や他者への意識の変化，将来に対する意識の変化，そして彼らが求めている支援の課題について明らかにしてきた。

震災前後の人生観の変化とPTGからなる25項目について因子分析を行い，性別・学年別・家屋の損壊の有無のグループに分けて平均得点をt検定によって分析した結果，性別では「他者とのつながりと備え」（$p<.05$），「命や日々の暮らしの大切さ」（$p<.01$）「運命論」（$p<.01$），家屋の損壊の有無では「自己の成長と積極性」（$p<.05$）「命や日々の暮らしの大切さ」（$p<.05$）「信仰と信頼」（$p<.05$）において有意差がみられた。

また，震災が進路に影響を与えたと回答する生徒の割合は全体の1割を超え，学年別にみると3年生が最も多かった。具体的には進路選択への意識や希望する職業において変化があったということが明らかになった。

さらに，半構造化面接法調査では，被災直後から現在に至るまでの震災による困難・支援ニーズや被災体験について現在どのように考えているかについて明らかにした。被災からの時間経過によって現れる子どもの各種の発達困難と支援ニーズは大きく異なり，震災に対する理解・捉え方も多岐にわたっていた。

今回の調査では，人生観の変化及びPTGは先行研究と類似する結果となり，進路にもかなり影響を及ぼしていることが明らかとなった。震災の経験をプラスに捉え直し，自分自身や周りの人との関係，将来について見つめ直すことへとつながっている一方で，現在も不安・恐怖を抱えており，今後も継続的に発達支援をしていく必要性が推測された。

今後の課題であるが，今回は東日本大震災で大きな被害を受けた地域の高校生を対象に調査を行ったが，被害のなかった地域の高校生との比較を行うことで，より問題が浮き彫りになる可能性がある。さらに，今回は心理的変化に注目したが，調査票に身体症状（身体の不調・不具合）に関する質問項目を加えることで，発達に与える影響を多面的に捉え，今後の発達支援の手立てをより具体的にすることができると思われる。

附記

本調査に全校を挙げてご協力・ご支援いただいた岩手県立B高校の生徒と教職員および岩手県教育委員会・A市教育委員会の皆様に心より深く感謝申し上げる。

文献

阿部一咲子・平田京子（2016）東日本大震災を経て重視された絆に関する一考察―社会の価値観の変遷に注目して―，『日本女子大学紀要家政学部』63，pp.37-47。

安倍芳絵（2014）東日本大震災を中高生はどう受け止めたのか―中高生のアイデンティティ発達の視点から―，『工学院大学研究論叢』51(2)，pp.73-87。

浅野晴哉（2015）東日本大震災被災県における中学生の命の大切さに関する態度の変化，『心理臨床学研究』33（4），pp.417-422。

蛯原千晶・久田満（2016）青年期における被災体験とその関連要因―東日本大震災で被災した福島県の人々を中心に―，『上智大学心理学年報』40，pp.65-72。

江澤和雄（2012）災害後の児童生徒の心のケア，『レファレンス』62（1），pp.35-62。

藤井義久（2013）被災地における中学生の不安感情に関する研究―東日本大震災直後の調査結果を中心に―，『感情心理学研究』21，p.19。

藤田和也（2014）被災地の養護教諭が語る東日本大震災―被災時の体験と果たした役割から何を学ぶか―，『日本教育学会大會研究発表要項』73，pp.348-349。

船越俊一・大野高志・小高晃・奥山純子・本多奈美・井上貴雄・佐藤祐基・宮島真貴・富田博秋・傳田健三・松岡洋夫（2014）自然災害の諸要因が高校生の心理状態に及ぼす影響の検討―東日本大震災から1年4か月後の高校生実態調査―，『精神神経学雑誌』116（7），pp.541-554。

原美穂子・土岐祥子・藤森和美（2014）自然災害時に子どもの心のケアに携わる教員のニーズに関する研究―関東圏で東日本大震災を経験した教員のインタビュー調査―，『武蔵野大学心理臨床センター紀要』14，pp.29-43。

林みづ穂（2016）災害後の子どものこころの反応とその対応，『小児の精神と神経』56（2），pp.137-144。

本郷一夫（2014）時間の流れの中での支援―子どもの成長と生活の変化―，『教育と医学』64（3），pp.64-70。

本間博彰・小野寺淑実・高田美和子・吉田弘和・冨永美弥（2012）東日本大震災と子どもの心のケアについて（報告），『児童青年精神医学とその近接領域』53（2），pp.128-136。

稲葉光彦（2013）東日本大震災後の被災地での児童虐待問題実態について，『富士常葉大学研究紀要』（13），pp.213-227。

石本日和子（2016）被災体験の自己理解と教師の支援―阪神大震災時小学生だった青年の「語り」からの考察―，『臨床教育学研究』4，pp.56-69。

磯邉聡（2011）学校臨床における被災した子どもへのメンタルケア，『季刊教育法』169（6），pp.22-28。

菅野郁・竹村祥子（2015）災後教育の観点の指摘と未来へ向けた検討，『現代行動科学会誌』31，pp.34-43。

小林朋子・櫻田智子（2012）災害を体験した中学生の心理的変化―中越大震災1カ月後の作文の質的分析より―，『教育心理学研究』60，pp.430-442。

近藤卓（2016）PTG心的外傷後成長とは何か―PTGのプロセス―，『児童心理』70（1），pp.122-129。

熊谷圭二郎（2013）震災後の対処方法と人生観の変化―東日本大震災1年後の高校生への調査を通して―，『鳴門生徒指導研究』23，pp.103-116。

黒木俊秀（2012）瓦礫の下に埋まったままの心―被災地の子どもたちは今―，『教育と医学』60（3），pp.4-11。

丸山奈緒（2003）阪神・淡路大震災における青少年の心理面への長期的影響について，『臨床教育心理学研究』29（1），pp.1-7。

三宅一代（2011）災害により影響を受けた子どもの生活と健康へのケア，『教育と医学』59（11），pp.21-29。

森本晋也（2017）岩手県沿岸地域の学校と子どもたちは，今，『歴史地理教育』861，pp.22-27。

村岡弘朗（2011）子どもにとっての学校の大切さ―阪神・淡路大震災の経験から―，『教育と医学』59（11），pp.56-63。

中薗伸二・南哲（2001）阪神・淡路大震災後5年における大学生への震災経験における調査研究，『安全教育学研究』1（1），pp.97-106。

西本実苗・井上健（2004）震災後の心理的変化―人生観を中心とした検討―，『関西学院大学人文論究』54（3），pp.72-86。

岡田(高岸)由香・北山真次・宅見晃子・山本明代・鎌江伊三夫・中村安秀（2005）阪神淡路大震災9年後の子どもたちの心身の健康状況に関する研究，『神戸大学都市安全研究センター研究報告』9，pp.329-334。

奥山純子・船越俊一・本多奈美（2016）地震を経験した子どもの心理的問題についての文献検討，『児童青年精神医学とその近接領域』57（1），pp.183-194。

奥山純子・船越俊一・本多奈美・富田博秋・小高晃（2016）東日本大震災で被災した高校生の不登校について，『精神科治療学』31（5），pp.89-93。

大沼詩織・藤原忠雄（2015）東日本大震災被災地の児童生徒の心的外傷後成長（PTG）に関する研究―PTGの実態，及びレジリエンス，自尊感情，ソーシャルサポートとの関連の検討―，『学校メンタルヘルス』18（1），pp.4-13。

笹原和子・朝倉隆司（2017）福島県沿岸部の高校生が東日本大震災により受けた心身の健康への影響：被災後のフォローアップ調査，『学校保健研究』59，pp.3-18。

佐藤静・齋藤潤（2013）東日本大震災における防災・心理教育―被災地における一中学校の実践し例を参照して―，『宮城教育大学紀要』48，pp.251-259。

塩川宏郷・八木淳子・宇野洋太（2013）東日本大震災後のメンタルヘルス支援：宮古・子どものこころのケアセンターを受診した症例の検討，『小児の精神と神経』53(3)，pp.259-263。

清水將之（2013）子どもの心傷はどのように回復していくのか，『教育と医学』62(3)，pp.5-11。

高田哲（2011）災害が長期化した際の子どもの健康へのケア，『教育と医学』59(11)，pp.30-38。

高橋聡美・佐藤利憲・西田正弘（2013）東日本大震災で大切な人を失った子どもたちへの心の支援，『安全教育学研究』12(2)，pp.47-60。

髙橋智・田部絢子・松本直巳・山下揺介・内藤千尋・石川衣紀・石井智也（2013）東日本大震災と特別支援教育の課題―被災地域の教育委員会・避難所調査から―，『特殊教育学研究』51(2)，pp.171-176。

宅香菜子（2005）ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討―ストレスに対する意味の付与に着目して―，『心理臨床学研究』23(2)，pp.161-172。

田中究（2014）大切な人・物を失った，大きな災害・事故に遭った―子どものトラウマとPTSD（心的外傷後ストレス障害）―，『児童心理』68(3)，pp.62-67。

田中真理（2016）震災に遭った子どもに起きること―あのときの力，その後の成長―，『教育と医学』74(12)，pp.52-59。

田中孝彦（2016）東日本大震災と復興の思想―五年間の現地訪問・聞き取り調査から―，『臨床教育学研究』4，pp.7-23。

上山眞知子（2016）東日本大震災から学んだ心理社会的支援―子どもと高齢者への支援―，『生涯発達研究』9，pp.7-18。

宇佐美政英（2015）宮城県C市の子どものメンタルヘルス―中学生を中心に―，『児童青年精神医学とその近接領域』56(4)，pp.108-116。

吉田弘和（2015）宮城県B市の子どものメンタルヘルス―小学生を中心に―，『児童青年精神医学とその近接領域』56(4)，pp.104-108。

吉田弘和・水本有紀・佐藤美和子・小野寺淑美・本多奈美・富田博秋・本間博彰（2016）東日本大震災後2年間の震災関連症状による児童精神科クリニックの受診患者に関する研究，『児童青年精神医学とその近接領域』57(1)，pp.195-204。

渡邊素子・野村あすか・西井香純・服部恵・松本真理子・窪田由紀・森田美弥子（2016）本邦での大規模自然災害における子どもの心のケアに関する文献展望，『心理臨床学研究』34(5)，pp.557-567。

東日本大震災が子どもに与えた心理的影響と発達支援の課題

── 震災６年後の岩手県沿岸部の高校生調査を通して ──

Issues of Developmental Support and Psychological Influences Given to Children by the Great East Japan Earthquake:

Survey of High School Students in the Coastal Area of Iwate Prefecture Six Years after the Earthquake

菅井　遥*1・能田　昴*2・髙橋　智*3

Haruka SUGAI, Subaru NOHDA and Satoru TAKAHASHI

特別ニーズ教育分野

Abstract

In this study, we investigated previous studies about the developmental impact of disaster on middle and high-school students, and based on that, we carried out a survey for Iwate prefectural B high school students in city A of Iwate coastal area which suffered huge damage by the Great East Japan Earthquake to clarify the developmental changes due to the Great East Japan Earthquake, and to clarify the changes in their view of life, consciousness to others, changes in consciousness towards the future, and the support problems.

We conducted a questionnaire survey on 495 students from 1st to 3rd grade enrolled in Iwate prefectural B high school. After that, we conducted semi-structured interview on 16 students among them who consented at the time of answering the questionnaire survey.

The factor analysis was carried out on 25 items concerning changes in the view of life before and after the earthquake and PTG. The average score was analyzed by t-test, divided into groups of sex, grade level, and breakage of a house. As a result, significant differences were found, in sex, “connection with others and preparation” ($p < .05$), “the importance of life and daily living” ($p < .01$), “fatalism” ($p < .01$). And in breakage of house, “self-growth and positiveness” ($p < .05$), “importance of life and daily living” ($p < .05$), “faith and trust” ($p < .05$) were clarified.

The proportion of students who answered that the earthquake affected the course of his or her life exceeded 10% of the total, and the 3rd graders were the most frequent. Specifically, it was clarified that there was a change in course selection and career decision.

In semi-structured interviews, we clarified the difficulties due to the disaster, support needs, and clarified that how students think about the experience of disaster from immediately after the disaster to the present. Depending on the time passed from the disaster, the difficulty and support needs of the students were greatly different, and their thoughts on the disaster also ran wide.

---

*1 Iwate Prefectural Kuji East High School (36−10 Monzen, Kuji-shi, Iwate, 028−0021, Japan)
*2 Shiraume Gakuen University (1−830 Ogawa-machi, Kodaira-shi, Tokyo, 187−8570, Japan)/ United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
*3 Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)

In this survey, the result of changes in the view of life and PTG resembled that of previous studies, and we clarified that those had a considerable influence on course selection. The students still have anxiety and fear, while they have redefined the experience of the disaster positively and have reconsidered on themselves, their relationships with the surrounding people and the future. It is indispensable to continue to support students in the future.

Keywords: The Great East Japan Earthquake, Iwate Prefecture, High school students, Disaster and developmental impact, PTG

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究では，災害が中高生に与える発達的影響に関する先行研究の検討を行い，それをふまえて東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県沿岸部のA市の岩手県立B高校生徒を対象に，震災から6年半後における被災地の高校生の東日本大震災による発達的変化について調査を実施し，人生観や他者への意識の変化，将来に対する意識の変化，そして彼らが求めている支援の課題について明らかにしてきた。

調査対象は，東日本大震災当時に津波による甚大な被害を受けた岩手県沿岸部A市の岩手県立B高校に在籍する1年生から3年生の全生徒495名から質問紙調査法の回答を得た。質問紙調査法の回答者のうち，質問紙調査回答の時点で同意を得ることができた16名に対して半構造化面接法調査を行った。

震災前後の人生観の変化とPTGからなる25項目について因子分析を行い，性別・学年別・家屋の損壊の有無のグループに分けて平均得点をt検定によって分析した結果, 性別では「他者とのつながりと備え」($p<.05$)，「命や日々の暮らしの大切さ」($p<.01$)「運命論」($p<.01$)，家屋の損壊の有無では「自己の成長と積極性」($p<.05$)「命や日々の暮らしの大切さ」($p<.05$)「信仰と信頼」($p<.05$) において有意差がみられた。

震災が進路に影響を与えたと回答する生徒の割合は全体の1割を超え，学年別にみると3年生が最も多かった。具体的には進路選択への意識や希望する職業において変化があったということが明らかになった。

さらに，半構造化面接法調査では，被災直後から現在に至るまでの震災による困難・支援ニーズや被災体験について現在どのように考えているかについて明らかにした。被災からの時間経過によって現れる困難・支援ニーズは大きく異なり，震災に対する思いも多岐にわたっていた。

今回の調査では，人生観の変化及びPTGは先行研究と類似する結果となり，進路にもかなり影響を及ぼしていることが明らかとなった。震災の経験をプラスに捉え直し，自分自身や周りの人との関係，将来について見つめ直すことへとつながっている一方で，現在も不安・恐怖を抱えており，今後も継続的に支援をしていく必要性が推測された。

キーワード: 東日本大震災，岩手県，高校生，災害と発達的影響，PTG